

編集部だより

秘密はいつ出すの？ 今でしょ！

2013年12月19日 木曜日

12月22日、上野村元村長命日を前にして

青山透子

まもなく故黒澤丈夫元上野村村長の三回忌です。

私がインタビューをしたのが2009年10月、そのあと年明けに入院されて2011年12月22日に亡くなられました。1913年12月23日生まれでしたから、お誕生日の前日となります。

黒澤元村長へインタビューをしているビデオと写真は、私の持っているものが最後となったことと思います。今でもその様子が目に浮かびます。時折見せる笑顔や筋の通った誠実な話し方、そしてきちんとした姿勢が印象的でした。

もし今、ご存命なら今回の特定秘密保護法成立について、怒り心頭だったと思います。なぜならば、この法案の原案を出したのは、なんと1985年、それも中曽根元首相が出したものだからです。そして1985年12月にさすがに反対があつて廃案となったのが、今回のベースになっているからです。

1985年に出した法案を今、成立させてしまった責任は、国会のみならず選挙民として私たち一人ひとりにあると思います。この事故原因を不透明にしたまま、28年間も放置してきたからです。この不透明さを許した背景があつての今とすると、この国の未来は不透明のままでしょう。施行まで、まだ1年間あることがせめてもの救いです。

未来への汚点を残さぬように、今こそお願いします。

せめて、どのような事でもよいですから、自分が見聞きした事実を私に伝えてください。そしてその証拠を送ってください。誰もが自分のこととして、協力し合い、情報を共有してこそ本当の未来が見えてくると思います。

いまのうちに、ぜひお願いします。

目の前にいる子供たちのために、そして嘘で濡れ衣を着せられた人のために、訳も分からず亡くなった人々のために。

今が、その時です。

カテゴリー: 編集部だより

サイト管理人です

2013年3月21日 木曜日

こんにちは、サイト管理人です。

東京は例年よりも驚異的な早さで桜が見ごろとなり、随分と早く春が訪れています。

この季節になると、3年前『天空の星たちへ』の出版に向けたバタバタの日々を思い出します。

校正作業も最終段階にさしかかった頃に次々と重要な方々への新規取材アポイントが取れ、著者の青山さんと取材に行っては新しい情報に驚き、限られた時間の中でそれをどう本文に反映するかを相談し、加筆修正を繰り返してようやく発売にこぎつけました。

また、発売日は偶然にもその年の御巢鷹の尾根の山開きと同じ日になり、520名の方々が応援して下さっているのかなと思ったり、また、この本は数ある日航機墜落事故を扱った本の中でも、きっと高い評価を受けるだろう、という思いも確信に変わりました。

それからほどなくして、無事この本が書店に並び、たくさんの読者の方々をはじめ、医師、歯科医師、学者、ジャーナリスト、弁護士、航空関係者等、様々な立場の方がそれぞれの専門分野からこの本に関心を寄せて下さり、ご協力を頂いている次第です。こうして、出版から3年が経とうとしている現在でも、このサイトを通じてたくさんの読者の皆様と意見交換をさせて頂くことが出来、改めてこのサイトを開設して良かったと思っております。

どんな意見や感想、または当時見聞きしたことでも、声にすることによって、この事故が過去のものではない、と世間に広く知らせることになります。

事故の再調査を実現するためにも、一人でも多くの方にこの事故のことを知って頂ければと思います。

これからも皆様のご協力をよろしくお願い致します。

カテゴリー: 編集部だより

新年明けましておめでとうございます～今年も皆様のお力を貸してください～

2013年1月10日 木曜日

新年明けましておめでとうございます～今年も皆様のお力を貸してください～

青山透子

2013年1月吉日

このサイトが出来てから今年で3年目となります。2010年の出版以来、実に多くの方々からご連絡を頂き、共に語り合いました。そして今もそれが続いています。

当時の政治家、大臣経験者、自衛隊の方、JAL整備士、パイロット、亡くなったクルーのご親族の方、上野村の方々、映画監督、故黒澤上野村元村長、ご遺族の方々、大学研究者、作家、そして最も大切な読者の方々……。

事故関連の数多い書籍の中で出版後もこだわり続けている著者は、恐らく私だけでしょう。この事故についてこのようなサイトで対話を続けているのも私だけです。

事故後に生まれた若者が28歳となった今、事故を覚えている人達も段々と減ってきております。少しでも多くの方々に事実を伝えていきたいと思えます。

今年は「臆病な助言を克服するには」、について考えてみたいと思えます。

この事故の事件性を語ると、それを聞いた周りの人間の中で、必ず臆病な助言をする人がいます。

「そんなこと知ってどうするの?」、「危ないじゃないの?」、「誰かに後をつけられるのではないか?」といった言葉です。

これらは、その人の妄想や、自己暗示や、恐らくサスペンス映画の観過ぎなどでしょうが、私達は知らない間にそんな呪縛の中で生きています。

特に日本の風習からくるのか、狭い国土の閉塞感なのか、変化を望むわりには事を荒立てるのが嫌いで、他の人の目を常に気にします。

政治でも世の中の変化を願いつつも、いつもと同じ、変わらないほうへ投票し、それを嘆き、文句を言いつつ、流されて生きている……そんな人達がほとんどでしょう。

相手への嫉妬心も多く、どこかで出る杭を打ちたくくなりますし、足を引っ張りたくもなります。そんな人間は一度権力の座につくと、逆にそれを守ろうとして、真実をゆがめたり、相手を陥れようとします。誰もが心の奥底にもつ二面性ですよね。そういった心が、相手の行動を咎める言葉へと変化するのです。

今年は、不安な自分の気持ちを臆病にさらけ出す言葉ではなく、相手の言葉を受け止めて、「一緒に考えてあげる」、「一緒に調査してあげる」、「理不尽な世の中を一緒に考えてあげる」という視点に変えましょう。もし、臆病な助言をされたら、「一緒に考えてよ」と周りの人達に伝えてください。

誰もが自然とそう表現することが出来た時、この事件はきっと解決に向かうと私は信じています。

無責任なネット上の評論家的な茶化しではなく、真剣に考えてくれる方を少しでも増やしていきたいと思います。

今年もご協力のほど、どうぞよろしくお願い致します。

カテゴリー: 編集部だより

2012 年を振り返って 青山透子

2012 年 12 月 28 日 金曜日

2012 年を振り返って 青山透子

皆さんにとって、どのような 1 年でしたか。

私の本の帯を書いてくださった沈まぬ太陽の監督、若松節朗氏の作品、「WOWOW ドラマ尾根のかなたに〜父と息子の日航機墜落事故」が、文化庁芸術祭テレビドラマ部門で優秀賞を受賞しました。ご覧になった方も多いでしょうが、まだの方は DVD が出ますので是非ご覧ください。私もボランティアで、当時の資料を提供しました。

HP は下記の通りです。メイキングの映像も面白いですし、俳優のインタビューも心にしみるものがあります。ぜひクリックしてみてください。

<http://www.wowow.co.jp/dramaw/onenokanatani/>

さて、風化を防ぐにはどうしたらよいか。答えは簡単です。今知っていることを自分の周りの人 10 人以上へ伝えることです。その人達はまた更に 10 人、そして自分より若い人へ 10 人と、こうやって行くしか方法はありません。

また、日航安全啓発センターにもぜひ行ってみてください。一般人の方も大丈夫ですが、

事前予約が必要です。そこでは 8119 号機の残骸に接することが出来ます。めくれ上がった垂直尾翼、圧力隔壁、先輩の赤い手帳もちゃんとあります。机上の論理ではなく、実際見て感じてみるのが重要です。工学系の勉強をしている方で、金属剥離や風圧などの知識のある人は、その展示物を見て、本当にこの沢山の鉄板の仕切りや塊を破壊せずに、垂直尾翼だけが吹き飛ばすほどの風圧が生じたのか？と考えてみてください。ジャンボ機の垂直尾翼の模型もあります。そこから垂直尾翼内は空洞ではない、という事がよく分かります。素人でもそういう視点で物事を観察すると、本当の事実が見えてきます。

本を読むばかりではなく、現地や実物を通じて考察することが大切です、ドラマを見ることで遺族に共感し、自分の問題として捉えることも重要です。

皆さんの心から湧き上がる疑問に答えるべく、来年も努力していきたいと思えます。

よいお年をお迎えください。

カテゴリー：編集部だより

御巣鷹の尾根での出会い

2012年9月11日 火曜日

御巣鷹の尾根での出会い

青山透子

今年は、大学の研究者の方や弁護士、そして私の読者の方々と共に慰霊登山が出来ましたことを大変うれしく思っています。特に前山先輩（拙著の中での仮名）の墓標の前で語り、本を通じて知り合った見ず知らずの方が先輩に想いを馳せてくださったことは、人と人の出会いのパワーを感じました。こうやって未来へ繋いでいくことが大切なのではないかと思つづく思っています。

人の寿命を超えて、若い世代へ残していくことで、必ず事實は明らかになります。

例えば、日本では様々な公害問題がありましたが、水俣病を例にとると、50年後の「水俣病に係る懇談会提言書／平成18年9月19日・当時の環境大臣の私的懇談会」では、当時、病気の存在をチッソ水俣工場の排水が原因ではない、とした人々に対して、まったくこの公害問題を注視していなかった人を名指して批判しています。逆にいうと、50年とい

う歳月を経ないと真実が解らない訳です。

まず、被害を拡大させた行政の責任としては、熊本大学の研究内容からチッソの排水が原因ではないか、という指摘について「行政側は今の段階では何とも言えない、まだまだ手を打てない、大学に行政のことまで口を出してもらいたくない」とし、だからと言って「積極的にデータ調査をしたわけでもなく、緊迫感のなく」、自ら何もせずいたのであって、これは「出来るだけコトを荒立てずに様子を見ていこうということなかれ主義」が見えると書いてあります。

一方政治は、チッソが国策会社として巨額の利益を生むことや地元ではチッソによってかなり潤っていたという経済面からのみ判断し、さらに厚生省と通産省の見解の違いが争いとなり、時間ばかりが過ぎていきました。国側の不作為の姿勢を決定づけたのは「池田勇人通産大臣(当時)」の「水俣病の原因がチッソ水俣工場の排水から流れ出ているとするのは早計である」と結論づけたことで、一層国側、政治側の姿勢が不作為になっていきます。

それを後押ししたのは経済界で、その人達について当然のことながら名指しで批判し、さらに御用学者となった人について「企業や業界や行政に迎合する異説、珍説を同等に評価する日本の学界の指導層の知的貧困と倫理観の稀薄さは、目を覆いたくなるほどであった」と記述しています。こうやって何もしないまま、ドンドン被害が拡大していったのです。

これらの点について「政府の学識経験者を集めての審議会や専門家会議に対する国民の信頼を失わせる役割を果たすことになった」事を水俣病の教訓としています。

この流れは、今の原発問題とまったく一緒ではありませんか？

いつまで経っても教訓がまったく生かされず、昔から同じような失敗が繰り返されている事実。そして50年後に当時の人々を批判する報告書が書けるのならば、なぜもっと早く出来ないのか。それは50年という年月で関係した人が死んで言いやすくなるということでしょうが、逆にいうとそれだけ長い間、真実が曲げられていて苦しむ人がいるということです。

これらは今を生きている私達の責任でもあります。読者のみなさんもぜひ水俣病の報告書を読んでください。今の私達の行動をどうするべきかを教えてくれると思います。

ネットでも読めますので下記がアドレスです。

環境省ホームページ

<http://www.env.go.jp/council/toshin/t26-h1813.html>

カテゴリー: 編集部だより

今、私達がすべきことは何か～未来への展望を胸に～

2012年8月7日 火曜日

今、私達がすべきことは何か～未来への展望を胸に～

2012年

8月 青山透子

毎週金曜日、原発再稼働反対を訴えて、国会を取り囲む人たちが増えてきています。

私の本を高く評価してくださった大石芳野氏(写真家)が、参加者の表情をカメラに収めている風景がNHKのクローズアップ現代で放送されました。(NHKオンライン『デモは社会を変えるか』7/26日放送 http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3235_all.html)

その中で、大石氏は「もし自分のことだけ考えていれば来なくてよい、でも自分に対していかなければ、と思ったから来ているのですよね。あの真剣さは今までたくさんはなかった。誰かがやってくれると思っていた。しかし、自分が声をあげなきゃと思った。すごい真剣ですよ」と、集う人々を撮影しながら語っていた。

拙著の書評を書いてくださった時も、私の本の説明を聞いてくださった時も、優しさの中にも真剣なまなざしで、真実を見極めようとする姿勢が感じられた大石氏ですが、報道カメラマンとして戦場を歩いたご経験から、何事にも目を背ければ簡単にもかかわらず、それを直視し、現場での現実を伝えたい、それにこだわるプロ魂を感じました。

原発事故を経験し、私達日本人は今後の社会をより良いものに再構築するために自らが改革しなければならぬと私も強く感じています。

原発事故の現場にいた300名以上の東電社員の証言を集めたNHKスペシャル「メルトダウン・連鎖の真相(2012・7・21放送)」では、東京電力の制服を着た社員が覆面でインタビューを受けていましたが、その内容は東京電力としての事故調査報告書には書いてい

ない部分にまで詳細に突っ込んで問題提起をしていました。そこからわかることは何でしょうか。社員一人一人が声を上げて、組織体としての会社の報告書に事実は反映されていない、ということです。

日本航空の事故の場合はどうだったでしょうか。拙著で取り上げた地元群馬県上野村の村長（故黒澤丈夫氏）の声も、4名の生存者の声も、日赤関係者、歯科医師、現場の人々やパイロット、客室乗務員等といった当事者たちの声は全く反映されませんでした。事故調査報告書は机上の実験の資料添付を中心とし、不起訴で裁判が開かれなかった点や、情報公開法施行直前に意図的に故意に大量の重要書類を破棄した点を考えても、あまりにお粗末なやり方で、私達市民一人一人へ情報を隠蔽していました。相手側が証拠品を握ったままで、一方的に書いてある報告書に何の信憑性や客観性があるのでしょうか。

今、いろいろな場面で冤罪事件が明らかになりつつあります。科学的根拠や客観的資料の公表がベースとなっています。

私達の未来を守るためには、組織的隠ぺいに対して、正当な方法で声を上げて、それを大きなパワーにすることです。この公式サイトは、皆さんにそのような場を提供するために情報提供を呼びかけたページです。天空の星たちへの追悼の意を込めて、ぜひこれを読んで下さった方は周りの方々、10名以上に声をかけてください。それが風化を防ぎ、風化をこっそり願っている人への圧力となって、本当に大切な未来と日本人の心をよみがえらせるきっかけになると願っています。そう思い、今年も茜色の雲に誓いました。

カテゴリー: 編集部だより

今こそ事実を語る時

2012年3月5日 月曜日

今こそ事実を語る時

青山透子

まもなく3・11が近づきます。あの日、皆さんの感じた思いや経験は今、活かされているのでしょうか。故郷を失った人、肉親を失った人、人生が劇的に変化した人、様々な思いを胸に抱えて、あの日をもう一度振り返ってみることで見えてくるものがあります。

きっと今から何十年も経た後、事実と全く異なった現場での出来事、報道されなかった事実、あったのになかったことになった事実等、きっといろいろなことを検証しながら考

えさせられる日が来ることでしょう。

実際に起こったことがあまりに大きすぎる時、知った事実があまりに影響がありすぎると判断した時、自分自身の理解と度量の範囲を超えた時、人はどうしても見なかつたふり、知らなかつたふりをすることで己の守りに入ります。そしてそれらの事実を忘却の彼方に置き去りたい心境に駆られます。しかしあの大きな災害を経験した私達は、何をそこから学ぶべきでしょうか。運命を呪うことよりも、事実を受け入れてさらに検証し、今後に活かすことでより一層強く生きることではないでしょうか。

特に権力者、政治家、報道関係者、政府関連の仕事に携わっている人の中には、知りえた事実があまりに影響力が大きい場合、それを国民（住民）に伝えることをためらいます。そして後に「あの時はどうしようもなかった、後から事実がわかった、自分が怖かった、影響がすごすぎた、自分の立場を超えていた、職や地位を失いたくなかった、自分自身や家族を守りたかった」などと言って正当化して、検証を拒みます。

8.12の日航機事故時もそうでした。その意味でもあの事故を忘却の彼方にしないでほしいと強く思います。

毎年同じような記事を書いている新聞各紙、テレビ局、報道に携わっている方々に一つお願いがあります。事故原因に大きな疑問を持ち、その解明に支持して下さる方はいませんか。現役を引退した後も事故について何か心に残り、拘っている方々はいませんか。

今、少しずつ事故原因のおかしい点を認識して、解明しようとする輪が広がっております。それは事故後に生まれた若い世代を中心として、古い世代の過ちを検証しようとする動きにつながっています。なぜならば、真なる危機管理は過去の過ちを検証することであり、その方法でしか人間は進歩していかないからです。

パイロットの訓練も、飛行機事故のありとあらゆる場面を想定し、過去の事故を徹底的に検証してシュミレーションし、一つずつつぶして訓練をしていくことで、安全を確保していくからです。その積み重ねと日々の訓練が事故を減らし、突発的な事態に活かされるのです。その意味でもこの少子高齢化時代、老いていく人間は、せめて自分が見聞きしたことぐらい若い世代へ伝えることで見えてくる明日の意味を考えませんか。皆で真実を追究すれば明るい光が見えてくるような気がいたします。そしてジャーナリズム精神のある志高い方、ぜひとも応援して頂きたいと思っています。

カテゴリー: 編集部だより

上野村の元村長、故黒澤丈夫氏の志を継いで

2012年1月26日 木曜日

上野村の元村長、故黒澤丈夫氏の志を継いで

青山

透子

1月22日の上野村でのお別れ会は、冬の晴れ間の穏やかで暖かい日でした。今頃はまた大雪が降り、山々は真っ白な雪景色だろうなあと思いながら、先輩方の墓標に積もった雪を思い浮かべております。

あの事故から長い年月が経ち、未だに事実が明確に見えない状況でいることを考えると、数々の過去の過ちを引きずった政治や、組織的隠蔽などを見るに、どうも日本人は自分たちの力で解明することが非常に苦手なのではないかと思っています。

私の本を新聞等で紹介して下さった有名な写真家の大石芳野氏は、今連載中の読売新聞『時代の証言者』の中で、80年代当時と日本人の気質について、こう書いています。

「カンボジアで大虐殺が行われたことは絶対に間違いない、と断言出来る根拠と確信を持って私は日本に帰ってきた」ところが、当時の日本人は誰もが信じずに「この写真は本物の骸骨ではない、プラスチックの偽物だ」とか「ソ連の手先なのか」などと否定されてしまい、自分の写真が真実なのにもかかわらず、そこに映っている骸骨が本当かどうかといった話に行ってしまったとのこと。しかも否定する人々の声が大きく強いために、物事をまじめに受けとめようとする人を払いのけてしまう、日本人はのんきで極楽トンボなのではないか、それはカンボジアの虐殺された人々に対しての侮辱であり、大変失礼ではないか、もし逆の立場だったのならばどう思うのか、という点を指摘しています。

私もあのJAL123便事故当時の一般人の気持ちについて、新聞の逆読みでそれを感じています。圧力隔壁説が出るとマスコミも一斉にそちらに傾き、他の説など目に入りません。また異論を唱えられない状況に追い込まれます。同一民族同一言語の島国根性の弊害でしょう。

今回のオリンパスの巨額損失隠し事件もそうですが、英国や米国側からの調査や審査が入らないと日本人同士の内部では組織的に隠蔽し続ける、といった日本人の悪い体質を感じ

ます。新社長も自分を社長にしてくれた人は裏切れない、といった自己中心的な視点でしか考えられなくなっていくます。

JALの事故原因も、事故調査委員会が新しいメンバーになろうが、政治が民主党に代わろうが何も体質は変わらず、自らの力で不正を糾したり、過去の過ちを見つけ出して謝罪したりすることなどは永遠に無理なのでしょうか。

もしかすると日本人は「お家大事」ということを自己都合に利用しているのではないのでしょうか。何事も多少の犠牲はつきもので、真実は隠すもの、それによって不都合が大きい場合は隠蔽しても罪にはならない、などと思うDNAが組み込まれているのでしょうか。

よく「いまさら掘り返しても何にもならない」「そっとしてほしい、事実など知りたくない遺族もいる」という声を、自己の保身に利用する人がいます。それらは「真実が知りたい」「本当の事故原因を知らなければ何の解決にもならない」という人の知る権利を脅かすものです。今私達に出来ることは、自分が見聞きした情報をもう一度集めて整理することです。さらに多くの若者たちが当時の関係者やいろいろな場にいた人々へ聞き取り調査をして事実を明確にすることです。

まずは読者の皆さまの回りの方々に聞いてほしいと思います。声を大きくすることが世論を動かすことであり、皆さんと一緒に解明していこうと、故黒澤丈夫元村長の遺影写真を前に誓いました。

カテゴリー: 編集部だより

黒澤丈夫元村長の葬儀に参列しました

2012年1月23日 月曜日

皆さんこんにちは。サイト管理人です。

昨日1月22日に執り行われた、黒澤丈夫元村長の、村と黒澤家の合同葬儀・告別式に参列してきましたので、ご報告申し上げます。

祭壇には、上野村をイメージしたようなお花と木々が飾られ、葬儀の時間を待つ間には生前のインタビューがBGMとして流され、お若いころからの写真が祭壇横のモニターに写し出されておりました。



葬儀・告別式には、上野村の皆様はじめ、福田元総理や自衛隊幹部の方、日本航空の大西社長など、580人が列席。

日航 123 便事故のご遺族の方で、遠方から駆け付けた方もいらっしゃったそうです。

御巢鷹の尾根の管理人さんをはじめ、取材時にお世話になった方々にも再会し、黒澤元村長が村に残した功績と、日航 123 便事故を受けて、犠牲者とそのご家族に尽力を尽くされたか、改めて思い知ることとなりました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

カテゴリー: 編集部だより

亡き黒澤丈夫元上野村村長を偲んで

2011年12月27日 火曜日

亡き黒澤丈夫元上野村村長を偲んで

青山透子

2011年12月22日、群馬県上野村の元村長、黒澤丈夫氏がお亡くなりになりました。

お誕生日が12月23日でしたので、その1日前の97歳でした。

私がお会いしたのは2009年10月で、その時のお元気そうな姿が目に浮かびます。

多少耳が聞こえにくくなっていらしたため、インタビューにSONYの補聴器を付けて、2時間以上熱心にお話しをしていただきました。



2009年10月取材時の黒澤丈夫元村長

その際、私が持参した黒澤丈夫著「憂国の7つの提言」（1996年／上毛新聞出版局）に、「積陰徳」と書いて下さった力強い文字が印象的でした。

「積陰徳」― 本を執筆するにあたり、まだまだ不安も多かった私にとって、心の支えとなる言葉でした。なお、拙著の本の帯も快く引き受けて戴きました。

「あの夜、上空を飛んだ飛行機の中には、事故機がこの下で燃えていると視認した者もいる、方法も技術もある。なのになぜ10時間も墜落位置を特定しなかったのか。そこに公的な責任感による位置を探求する動きや、そこが何処と特定する公的意思がまったく働いていなかった！そう断言せざるを得ない」

上野村元村長・黒澤丈夫

この言葉は「あの事故を体験し、その時、現場で公の仕事をした人間の最後の責務」として書いて下さったもので、きっと読者の方々の心に響くはずです。

ぜひもう一度「天空の星たちへ」の「帯」を手にとってご覧ください。そこに黒澤氏の

心の中にずっと抱えていた深い意味と思いが込められております。

戦争体験者として一つの信念を持ち、村からの視点で地方住民中心の考え方をベースにして、今日の日本の国の有り様を憂い、政治家の墮落や中央政府の在り方に問題提起をされてきました。

あの事故の際、墜落現場となった上野村で、当初、指揮命令系統がはっきりせずに、誰もリーダーシップを取る人間がない中、村長として手さぐりで奮闘されていた様子が目に浮かびます。一切の情報が与えられない中で、突然降りかかった目の前の惨事に対応しながら陣頭指揮をとり、その中で浮かび上がった数々の疑問や問題点を私にぶつけて下さったのです。そうして出来上がったのが「天空の星たちへ」に書いたインタビューの部分です。当時の中曽根康弘元首相が事故現場に全く現れなかったことにひどく怒りを込め、次のように語ったのが印象的でした。

「イギリスで航空機事故が遭ったときサッチャー氏はたちまち現場に飛んできた。ところが当時の日本の総理大臣は軽井沢でゴルフをやっている。山下徳夫元運輸大臣も何も言わない。大体このような大事故が起きた時は事故收拾の最高責任者は総理大臣がトップだ。最高責任者として現場に来て、厳粛に礼を尽くすべきだ。彼だって一応軍人だった時代があるんだから。それが、こんな隣町の近いところで遊んでいるとは、まったく失礼千万ですよ！」

そう言い切ったあの時の険しい表情は忘れられません。

今、天空の星となり、あの日の 520 名の方々と一緒に、もう一度あの事故の状況について語り、その後わかった様々な報告をしていらっしやることでしょう。

心より哀悼の意を表します。

合掌

皆さんにとって 2011 年はどのような年だったでしょうか

2011 年 12 月 12 日 月曜日

今年もあとわずかとなりました。皆さんにとって 2011 年は何を感じて何を教えてくれた年でしょうか。

3 月 11 日の東日本大震災から日本全土の雰囲気ガラリと変わったような気がします。

失ったもの、大切なもの、気づいたこと、考えさせられたことが沢山ありました。

自分と向き合い、自然と向き合い、生死を見つめた年であったと思います。

この本を出版して1年が経ち、様々な人々との出会いは今もなお続いています。

今年は講演を通じて読者の人々との出会い、元自衛隊員の正義感溢れる方との出会い、元政治家、さらにわざわざ大阪から会いに来て下さった遺族の方との出会いもありました。

その方々は何を私に伝えてくれたのでしょうか。1985年のあの日からずっと続いている苦しさや想い、そして今後もこだわり続ける意欲と決意であったと思います。

特に今年は原発事故から学ぶことも多かったと思います。後から偽りや事実が明らかになっていくにもかかわらず、今なお混とんとしている現状をみると、政治の在り方、政治家の言動、官僚の動き、組織の在り方、市民の意識の在り方、情報公開とその真実などなど……あまりに26年前の日航123便事故と類似した動きでした。

ある討論会に参加した福島の避難区域の女性の言葉がとても印象的でした。

「私達は、本当のことが知りたいのです。事実が知りたいのです。あとから高い放射線量と言われても困ります。報道関係者は事実をきちんと報道して下さい。パニック防止、補償問題、苦情云々を気にして、国民に知らせない、伝えない、バイヤスをかけるなどは余計なおせっかいです。あなた方の仕事を全うして下さい。あの時テレビやラジオしか知る方法がなかった私達の気持ちにもなってください」

これらは何を教えてくれたのでしょうか。

この発言をした被災者の気持ちは、「判断するのは国民側だ」と言いたかったのだと思います。判断には個人差があっても当然です。それを「苦情を受けるのがいや、後でパニックになっても困る」といった勝手な判断は無用だと言いたいのです。

報道関係者や政府関係者、官僚は市民を守ると言いつつ、自分たちを（組織を）守っているだけであって、現場の市民を守っていない、そして異常なまでの自己規制にとらわれていることへの問題提起です。

いくら小細工をしても、いくら隠しても必ずいつかはばれる、いつかは真なる事実が世の中に出る、そしてその時ではもう遅いということです。

26 年前に事故原因について、自分が生きている間は「事実を知りたい、本当のことを明かしてほしい」と願っている人達があります。その一方で「事実や情報は出さないでくれ、明かさなでくれ」と思う人もいます。それに便乗して隠し続けたい人もいるでしょう。

しかし、過去の汚点は必ず暴かれ、過去の過ちは孫子の代に明らかになります。

人は失敗からしか学べないので、失敗の事実を隠しても未来はありません。

過ちや嘘を認め、失敗を検証してこそ未来が開けるのですから。

今年 7 月に運輸安全委員会事務局長の大須賀英郎名で、異例の事故調査報告書の解説が 24 年ぶりに出ました。(昭和 62 年 6 月 19 日の日航 123 便事故調査報告書の分)

そこでは水と空気の流れ方の違いをプールの例に当てはめたりしています。もともと排水することを考慮して設計しているプールの水の流れと水の総量と、もともと穴が開くことなどは想定していない構造の上空を飛ぶ飛行機の密閉状況と空気の流れは全く異なり、比べること自体おかしなことです。いずれにしてもこれらは、すべての証拠と事実を公平に情報開示してのみ有効であって、事故調査委員会側（政府側）が証拠を握り、裁判でそれらを公にしてもいないのに、自分たちの都合のよい事例のみを上げ連ねても、何の説得力もないことは誰もが気付いています。きっと今の委員の方々は恐らく心の中で自分たちの書いたものを愚かなことだなあ、と思いつつも、過去を否定するわけにもいかず、仕事としてやらざるを得ないのでしょう。

さて、私達は何をすべきでしょうか。それは拘り続けることです。それこそが世界最大の単独機事故を経験し、それを知っている人々の義務だと私は思っています。それがきっと大きな力となっていつか花開くときが来ることを信じたいと思います。

それでは皆さま、どうぞ良いお年をお迎えくださいませ。

2011.12.12 青山 透子

カテゴリー: 編集部だより

イギリスで出版された本の参考文献になっています

2011年10月13日 木曜日



『Dealing With Disaster in Japan～Responses to the Flight JL123』の表紙
皆さんこんにちは、サイト管理人です。

今年の7月にイギリスで出版された『Dealing with Disaster in Japan～Responses to the Flight JL123』という本で、本書『天空の星たちへ～日航123便あの日の記憶～』が参考文献として取り上げられています。

123便には海外の方も搭乗され、亡くなっています。

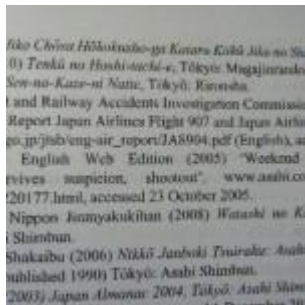
そのご遺族の講演を聞いたイギリスの大学の先生が書かれた本です。

日本人の心理にも触れ、遺体の状態や機内から撮影された写真も紹介されています。

イギリスで、この事故をテーマにした書籍は他にないのではないのでしょうか？

遠く離れた国にもこの事故に高い関心を寄せている方がいるという事実。嬉しいですね。

洋書を扱っている書店さんで手に入りますので、良かったらお手にとってみてください。



参考文献として本書が紹介されています。

カテゴリー: 編集部だより

空の事故

2011年9月9日 金曜日

こんにちは、サイト管理人です。

海外で痛ましい空の事故が起きてしまいましたので、書き込みをさせていただきます。

9月7日午後4時（日本時間午後9時）ロシア北西部ヤロスラブリでござる、地元のアイスホッケーチーム「ロコモチブ」の選手・コーチ37人と乗員8人の計45人が乗ったヤク42型旅客機が空港を離陸直後に墜落し、43人が死亡、2人が負傷。

同機はベラルーシの首都ミンスクに向かう途中で、高度不足のため空港敷地内のアンテナに接触したそうです。

事故の原因解明と、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたします。

また、国内でも6日夜、浜松市沖の太平洋上空を飛行していたエアーニッポン運航の那覇発羽田行き全日空140便ボーイング737-700型が、1900メートル突然急降下し、客室乗務員の女性2人が軽傷を負うという重大インシデントが起きました。

事故の原因はスイッチの操作ミス。

全日空によると、トイレのため操縦席を外した機長がコックピットに戻ってきた際、施錠していたドアを開けようとした副操縦士が、開錠スイッチとその左隣にある、方向舵の調

整を行う別のスイッチを誤って操作したため、機体が傾いて急降下約30秒間にわたって約1900メートル降下。

あわや大惨事となっていたかもしれないこの重大インシデント。

再発防止とともに、さらなる空の安全を願います。

カテゴリー: 編集部だより

日本航空123便の御巣鷹山墜落事故に係る航空事故調査報告書についての解説」

2011年8月12日 金曜日

「日本航空123便の御巣鷹山墜落事故に係る航空事故調査報告書についての解説」

～2011年7月29日運輸安全委員会ホームページ公開の解説書を読んで～

こんにちは、青山透子です。26年目の暑い夏、あの8月12日が巡ってきました。

昨年は民主党政権となって初めて前原元国土交通大臣が慰霊登山し、さらに今年、26年も前の事故についての解説書が出たことは大変画期的なことだと思います。

そして運輸安全委員の方々が4名、灯籠流しと慰霊登山をされたのも当然のことながら重要なことです。

一歩ずつようやく真なる事実に向かって進んできたとも言えます。

「自衛隊のミサイルがぶつかった」という主張も、荒唐無稽と一笑することなく、きちんと文章の中に取り入れたことの意義も大きいと思います。

ネット上で公開されるということは、当然のことながら誰もが目にする機会を与えられたということですし、昭和62年6月19日公表の事故調査報告書も比べて読むことが出来ますので是非お読みください。

その上で、このサイトをお読みの皆さんにもぜひ一緒に考えていただきたいことがあります。

この解説書は、主に8・12連絡会に入っている一部の遺族の方々の疑問点について答える

形で書かれています。補足説明のアドバイザーとして、昭和 60 年（1985 年）当時、日本航空米州第二路線室（NAB）第二グループに所属していたキャプテン（P-70 期）の本江彰氏、羽田の技術部（EEV/A）機体グループから BOEING COMMERCIAL AIRPLANE COMPANY に出向していた小林忍氏の両名が解説をしています。

しかし、ほんの一部の疑問点についていろいろと解釈をつけたとしても、それが客観的に正しいかどうかは誰が判断出来るのでしょうか。

事故に関する物証、様々な証拠品、生のボイスレコーダー（一部テレビ放送されたものや新聞報道、報告書に文字で書かれたものではなく加工していない実物の音声）、関係者の証言等々、裁判と同じように当事者、遺族、国民に透明性をもって偽りなく、すべての情報を公開してのみ、それが初めて実証されるのではないのでしょうか。

全ての証拠品を事故調側が持ち、一部のみ一般公開している現状において、ただ書面で与えられたものを検証するしかない国民側は、何を信じ、何を信頼していいのかわかりません。

それは目に見えない放射能と同じです。どうコントロールされているのか一方的に事故調の発表を信じるしかなかった時代に書かれたものだからです。

今起きている原発事故の放射能問題ならば、ネットで情報を集めることも出来、放射能測定器も売っており、ある程度は個人で情報が集められますが、この事故に関しては国民側に届いたものはほんの一部であって、事故に関しての情報は破棄され、消されたものも多いのです。

例えば解説書で、耳が破れない急減圧もありうる事例を出し、映画とは異なると書いてありますが、その事例に上がった飛行機事故の垂直尾翼は吹き飛んでいませんので、この事例も都合のよい部分のみ切り取った事例になります。

このように事故調側の見方を別のもう一方から読んでまとめると、簡単ですが次のようになります。

A：客室で実感（寒くない、鼓膜がやぶれないなど）出来ない程度の弱い急減圧が発生したのに垂直尾翼が吹き飛んだ

B：B747型の機体は想定外の荷重に弱い、内圧に弱い垂直尾翼だった

C：パイロットが会話をしながら酸素マスクも着用せずに 20 分以上操縦出来た

D：ミサイル、標的機が衝突したという説を否定する根拠になっていたのは「残存物に火薬や爆発の成分が検出されなかった」という点だが、ぶつかったものには火薬を積んでいなかったとする可能性を否定できない

E：「頑丈に出来ている油圧配管は外部からの物体が衝突しない限り折損するはずがない」と書いてあるが、実際は折損していることから、外部からの物体が衝突した根拠となりうる。

F：自衛隊が、現場に夜間降下しなかった理由については、自衛隊は普段の訓練で、昼間のみ有効な訓練をして 1985 年当時は夜間訓練を一切行っていなかったということになる

有事が起きるのは通常夜間だが、それで自衛が出来るのか？

このように、いくらでも逆の方向から見るとボロが出てしまい、何の客観性もなくなってしまいます。

つまり、誰もが納得するには、情報を全て公開して透明性をもって再調査する以外に方法はないと私は考えております。

すべてを公開して、同じ土俵の上に立ち、国民と同じ視線で調査をするのが本来の事故調査委員会の役割のはずです。

委員のお給料は税金から出ているのです。政治家もそうですが、どちらを向いて仕事をしていたのでしょうか、そしていまさら何を守ろうとするのでしょうか。

1985 年当時、いずれにしても事故調が向いていた方向は国民側ではなかったということとは、いまや誰もがわかっていることだと思います。実に悲しい現実ですね。

お亡くなりになられた天空の方々へ 合掌

運輸安全委員会ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/jtsb/kaisetsu/nikkou123.html>

報告書の解説

<http://www.mlit.go.jp/jtsb/kaisetsu/nikkou123-kaisetsu.pdf>

カテゴリー: 編集部だより

7月23日『grow up radio』

2011年7月26日 火曜日

先日の書き込みでお知らせしました埼玉県朝霞市の『すまいるFM』の『grow up radio』という番組に著者の青山透子さんが出演しました。

若いリスナーさんが多いとのことで、事故の概要説明が主な内容になりました。

30分番組でしたが、あっという間の30分でした。

事故を知らない世代にこの事故を知ってもらい、疑問を投げかける良いきっかけになったように思えます。

動画ライブが残っていますので、下記URLから閲覧できます。

ぜひご覧ください。

<http://twitcasting.tv/tprostuff/movie/2108652>

カテゴリー: 編集部だより

青山透子さんラジオ番組出演のお知らせ

2011年7月19日 火曜日

こんにちは。サイト管理人です。

毎日暑い日が続きますが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

さて、また今年も夏がやってきたということで、日航123便事故についてメディアの感心も高まっています。

今週末の土曜日に青山透子さんが埼玉県朝霞市のすまいるFMの番組に出演が決まりましたので、お知らせします。

7月23日(土)

埼玉県朝霞市のコミュニティFM『すまいるFM』76.7MHzにて
18:00~18:30
放送の『grow up radio』

という番組です。

埼玉県朝霞市周辺にお住まいの方以外は、インターネットを通じて視聴することができます。下記URLにて、地図中の埼玉付近をクリックすると、「すまいるFM」のアイコンが現れます。そこをクリックすると番組が視聴できます。

<http://www.simulradio.jp/>

カテゴリー: 編集部だより

読者とのつながりが実を結んだ京都講演 青山透子

2011年7月5日 火曜日

先月、京都にて講演を行いました。

この公式サイトを読んでもくださった読者の方が拙著を職場で紹介して下さい、それが御縁となつての講演でした。

もしこのサイトがなければ実現しなかつたと思うと、本を通じて皆さまとつながっているような気がします。職場の皆様、そして読者の方、本当にありがとうございました。

人との出会いも本当に不思議なものです。ついこの間までは見ず知らずだったわけですから、良い御縁というものは大切にしたいものです。

今、政府発表(新聞発表)の各地の放射線量と実際の放射線量の違いが問題となっています。

いろいろな場所で測定している人たちが、無料動画サイト『YouTube』で公開していますので、これはネットという存在があるからこそ、皆さんがわかるわけですね。

なお地方自治体独自に、地上からの距離（50センチや1メートルなど）で人のいる場所を想定して測定を行い、きちんと公表しているところもあります。

雑誌『週刊現代』にもホットスポットを測定して掲載しています。昨年、週刊現代で拙著に関しての取材過程で思ったのは、これは限りなく真実の報道であるということです。きちんと裏を取ってしっかりとした記事を書いていると思いました。

情報を国政の一部の人間が握っている、さらに報道関係者にジャーナリズムの精神があるかないかによって、事実は隠蔽されるかどうかが決まります。

今回の原発事故は、後から後から事実がわかり、それでもなお、この期に及んでも真実は出にくいものです。

26年前に携帯やネットがあれば、御巢鷹山の事故についても、もっと真実がわかったことでしょう。そう思うと本当に悔しい限りですね。

空の安全も地上の安全も透明性が不可欠であると思つづく思います。

そして真実を見極める目を養いたいものです。

カテゴリー：編集部だより

新聞逆読みの勧め：そこから見えてくる本当の事実とは？

2011年6月1日 水曜日

新聞逆読みの勧め：そこから見えてくる本当の事実とは？

青山透子

幼い頃から通った学校の「同窓会便り」が届くと、いつもとは異なる内容がそこに書いてありました。ご存知の通り私は宮城県出身ですので、今回の大震災で、幼稚園時代から小学校とずっと共に机を並べて勉強した多くの仲間たちがどのようになったのかずっと心配していました。

その便りには、現在の在校生の死亡人数、その父母の死亡人数、職員の死亡人数、家の全壊、半壊世帯数等が書いてありました。さらに同窓生の安否を調査中とのことでした。まさかこのような内容の同窓会便りが届くとは、ほんの数カ月前まで誰が想像したのでしょうか。

でもこれが現実なのです。

私はいつものように封筒を開けてその内容を見たとき、背筋が凍りつき、改めて今回の大震災の重みを感じました。

さて、今も原発による放射性物質は私達の頭上に降り注いでいます。このような事態になってしまった過程について、今一度振り返ってみましょう。

誰がどの時点で嘘をついていたか、誰がいつ何をしゃべっていたか、どの記事が偽りだったのか、世論はどう思っていたのか、今の情報と異なる点は何かなど、新聞報道を逆読みすることで一歩ずつ真実がわかってきます。

例えば、震災直後の記事には「胃のレントゲンと同じぐらいだ」という放射線量を単純に見比べた図表と「想定外」という文字、枝野官房長官の安心を強調した記者会見内容や「原発事故の燃料棒露出か?」「チェルノブイリと比べる必要はなく、それほど重大ではない」などの記事が並んでいます。

ところが今の時点で逆読みをすると、「想定外ではなく想定出来た想定内の事故」「放射線量の合算が重大な問題」「深刻な海洋汚染」「チェルノブイリ事故と同等かそれ以上の土壌汚染」「地震当日の 5 時間後にはメルトダウン」「地震直後、すでに東電も官邸も知っていた」等の文字が並びます。

もし情報というものが国（政府機関）や東電だけが握っていたとすると、その後の情報を都合の悪いことだとして隠し続けていたら、私達国民は何も知らずに「レントゲンレベルだから大丈夫ね」と、今頃はすべてを忘れて、知らない間に被爆し続けている可能性があるということになります。自民党時代から民主党（民のための党であったはず）になってもこれですから、情報の公開と共有は大変重要だということが、今回の原発事故で誰でもわかったと思います。ぜひ新聞の日にちを逆上ってお読みください。それがよく見えてきます。

実はこれと同じような流れが 123 便事故原因の報道でした。それを私は本にまとめたわけですが、26 年間もさかのぼって読んでも、残念ながら情報の一部は破棄され、隠し続けている人々によってまだ真実は見えません。しかし、それでも少しずつ発表された内容では、事故原因のおかしな部分が浮き彫りになってきました。

123 便事故直後には、航空評論家の故・関川栄一郎氏が自衛隊の標的機がぶつかった可能

性についても示唆していましたが、他の方も疑問を持っていた人達がいらしたのですが、それについて「荒唐無稽だ」「一生懸命救助をした自衛隊員に失礼だ」「無責任で馬鹿なことを言うな」「あり得ないこと」「事故調査委員はプロのだから、素人があさはかなことを言うな」などなど、頭から否定をする人達がほとんどでした。しかし、その否定する側にも何も根拠がないという事実は明白ですので、否定言葉は単なる感情的な言葉にしかすぎません。

世論というものは、事実よりも感情が勝ることが多々あります。それは今回の大震災においてもそうですし、事故原因についてもそうです。感情的に物事を考えると、真実がみえにくくなり、それに乗じて（それを利用して）自分の罪や失敗を隠そうとする人もいるのも事実ですから、うそつきの人に同調してうっかり感情に流されないようにすることも大切です。

ちなみに、原発を大丈夫だと強調した枝野氏の家族は地震後にシンガポールへ逃げているようで、閣僚会議でその話が出た際「たまたま旅行で」と言い訳したそうですが、もし本当ならばそれは旅行会社や航空会社が持つレコード（記録）を見れば、たまたまなのか、地震直後の予約なのか、機内での様子も含めてすぐわかります。あまりに浅い嘘はつかないほうがよいと思います。

それでもなお、世論調査では首相にしたいNo.1に枝野氏の名前が出ていることから、これが世論というものなのだと私達一人ひとりも自覚すべきでしょう。

とくにネットでは、自分の不利にならないように真実を曲げて、わざと相手の意見を否定する人も多いため、様々な角度から物事を見るようにしたいものです。世論に流されてはいけないのです。

つまり私が一番言いたいことは、誰も真実がわかっていないのであれば、今ある事実を深く観察し、様々な先入観を排除して、客観的事実を見つめる目が大切であるということです。その時、私が最も信頼をするのは、本物のプロの語りだけです。

この拙著を通じて出会った本物の自衛隊（元自衛隊）のプロの人達、本物のキャプテン、本物の研究者、そして本気でこの事実と正面から取り組もうとする人達です。

なお、本のあとがきにお名前を記させていただいた早稲田大学の水島朝穂教授も本物の研

究者の一人です。誰もが感情的に流されてしまうとき、あえて冷静に客観的事実を追求する目をお持ちです。123 便の事故原因について私が疑問を持った時も、水島教授は事実をまっすぐ捉えてくださいました。26 年前の日航機事故も、当時は見えなかった米軍と自衛隊の関係で色々な事実が年月を経てわかってきています。

今回水島先生は被災地を巡り、先生の研究の延長上に自衛隊と米軍の行動に関する考察が
おありになったようです。水島朝徳ホームページをご覧ください。

<http://www.asaho.com/jpn/bkno/2011/0509.html>

何か疑問やこれについて意見があれば、まずは水島教授の授業をしっかり学び、先生の今までの研究と同じような膨大な資料を深く読み込んでから議論という形で正面から堂々と話をすべきで、それには同等の知識を得てからすべきです。

感情的に走ってしまう人は一度立ち止まり、自分の発言が単なる腹いせなのか、劣等感からくる不快感なのか、真意を理解せずに浅い知恵の上で書いてしまったのかを考えるべきで、深く考察もせずにネット上でお手軽に相手を批判するのは名誉棄損で訴えられてもしかたありません。

さて「荒唐無稽」という言葉や「あり得ない（想定外）」という言葉や安易に使う人間は「逆に信用できない」「己の罪隠しかもしれない」ということは、今回の原発事故対応でもわかりました。

123 便の事故においても、今解明されつつある事実も踏まえて、皆さんでもう一度考えてみませんか。

今回の原発事故原因とその後の対応からみてもわかるように、いつも私達一般市民は裏切られているわけですから、今後はもっと冷静に見極める力を養いたいものです。

カテゴリー: 編集部だより

舞台のお知らせ

2011 年 5 月 10 日 火曜日

こんにちは、サイト管理人です。

今回は舞台のお知らせがあります。

去年の10月に下北沢スズナリで日航123便墜落事故のご遺族を描いた作品「葬送の教室」を公演された風琴工房さんが、今回の震災と東京電力の原発事故をうけて、来月15日にリーディング公演を行うこととなりました。

今回の原発事故における東電及び政府の対応と、26年前の日航123便墜落事故における日航と政府の対応、どちらもこの国の体質を露呈していますね。いろんな思いを抱えながら原発関連の報道を追っている日々です。

1日も早い事故の収束と、これ以上の被害が広がらないことを願って止みません。

公演の詳細は下記になります。

2011年6月15日（水）19時30分～

自由学園明日館 講堂

「Hgリーディング」 —Hg 第一話 猫の庭を読む—

この作品は、水俣病の加害企業であるチッソ内部で猫を使った実験が行われていた、

という歴史的事実を背景としております。

社員たちや付属病院の医師たちは原因がチッソにある、と解っていないながらその事実を隠蔽しました。

結果、さらに被害は拡大し、

50年を経てもなお解決しない大きな爪痕となって

彼の地を苦しめております。

しかしその影には握りつぶされた良心があり、

擦り切れていく個人の姿がありました。

大きな目標のひとつに被災地への金銭的支援がありますが、

（チケット代は最低限の経費以外被災地に全て寄付させていただきます。）

それにとどまらず、

50年以上が経っても変わらず繰り返される

現在のこの状況に対し、

詩森からみなさまへ、
演劇というかたちでの問題提起でもあります。

作・演出 詩森ろば

出演

佐藤誓
篠塚祥司
栗原茂(流山児☆事務所)
浅倉洋介
多根周作(ハイリンド)
山ノ井史 (studio salt)
北川義彦(十七戦地)
津田湘子
はざまみゆき(ハイリンド)

西山水木 (la compagnie A-n)

手話通訳 米内山陽子 (トリコ劇場)

料金

前売・当日共 1500 円

(チケット代は最低必要経費以外全て被災地に寄付いたします
)

全席自由

チケット予約開始日 2011 年 5 月 7 日 (土)

発起人

詩森ろば／津田湘子

後援

日本の問題製作委員会

<http://windyharp.org/windyharp/hgreading.html>

カテゴリー: 編集部だより

原子力推進派の中心人物である中曽根康弘氏をもたらした結果を見つめて 東電と J A L
—企業体質と政治家との関係 青山透子

2011年4月15日 金曜日

大震災から1カ月が過ぎてもまだ放射能汚染は続いています。

連日、顔なじみとなってしまった原発状況説明者の顔を見ていると、J A Lと東電の似た様な企業体質と会社の成り立ち、政治家との深いかかわりを比べざるをえません。

さらにチェック機能が働かない経済産業省の中にある原子力保安院の人達と運輸省（当時）と深くつながっていた事故調査委員会の人達もまったく同じように見えてきます。

新聞一面に並ぶおびただしい数の死亡者名簿やお棺が並んだ体育館も26年前を彷彿とさせ、死者、行方不明者の膨大な数を前にして思うことは、3月11日以前に、日本という国に亀裂が走り、国土が動き、大津波が押し寄せ、さらに放射能汚染に脅かされる日々を送るとは、一体誰が想像できたでしょうか。

原発の事故は人災であり、危険性は十分認識されてきたということを科学者たちは語っています。津波への対応が必要であるという論文が発表されていた事実も次々わかってきました。

新聞を逆読みしてみると非常によくわかりますが、ニュースや解説者の楽観的なコメントは一体何だったのでしょか。

中には、原発推進派議員やそれと親しい作家、ジャーナリスト、研究者などは大人ぶった正論のように、

「今は責任を追及する時ではなく、みんな一体となって頑張ろう！」的な発言をしていますが、責任は今追及せずいつするのでしょうか。さらに責任の所在を追及しないから危機的状況の今があるのでないでしょうか。責任とは原因究明に不可欠なものです。

プロの仕事をする人間たちは、責任を背負っているからプロなのです。それは顔つきにも十分現れてきます。テレビで見ていると、誰が本物のプロか、一目瞭然だと思えます。

責任を負うべき人間が責任を負わずに、都合のよいように曖昧にしてきたつけが今、国民の生命を危機に陥れているのであり、さらに放射能汚染で世界中に迷惑をかけているのです。

皆さん、市民が力を合わせて頑張ることと、責任ある立場の人間が責任を逃れることは別ですから、騙されないようにしましょう。

JALの事故原因も26年経っても明らかにされていないのですから、これがいい例です。

原発推進派議員として一番先にあげられるのは中曽根康弘氏です。

昭和29年（1954年）に初めて原子力予算を計上させて、その後原子力関連の小委員会等で委員長を務めてきたのも中曽根氏です。

さらにカーター政権で後退した原発関連事業は、レーガン時代に原発推進へと変わり、それを一緒になってやってきたのは中曽根氏ですから、JAL事故当時の1980年代はまさに原発推進の日々でした。

ちなみに中曽根氏の娘婿の鹿島建設が福島原発建設を担当していますし、御巢鷹山の真下にある東京電力神流川水力発電所も鹿島建設です。元首相の地位を利用して鹿島建設に仕事を割り振っているといわれても反論する余地はないと思います。公共工事ではないからとか、一私企業だからという言い訳はききません。

それにしても、推進派として今になってこのような事態になったことをどう思っているのでしょうか。この期に及んでも、自分が日本経済や石油資源のない日本にとって良いことをしてきたのだと自負しているかもしれませんし、テレビにちょこちょこ出て、その存在をアピールするのが関の山かもしれません。しかし、こういうのを老害というのではないのでしょうか。

未来は若者に任せるべきであり、これからの新しい日本を背負う人々へ不都合な事実を隠すべきではありません。

それにしても、東電社長が謝罪して歩いている姿とJALの事故後に謝罪して回った高木養根元日本航空社長の顔もダブってしまいました。不透明で責任感のない経営と企業体質は同じだとわかりましたし、画面を通じても形ばかりの言葉で心がまったく伝わってきま

せんが、その影で、責任転嫁をしている中曽根氏のような政治家たちも一緒に頭を下げて回るべきではないでしょうか。

私の脳裏には、科学者の目で原発を見つめ、市民一人一人がもっと知力を身につけて生き抜く必要性を説き、原発依存へ危機感を抱いてきた故高木仁三郎氏の先見の明を大学院で学んだ記憶が蘇りました。

一人ひとりの小さな力を集めて、大きなパワーとする必要が今こそあるのではないのでしょうか。私はそういう人たちと一緒に、大震災後の新たな日本のあるべき姿を見つめていきたいと思います。

参照：

高木学校 <http://takasas.main.jp/>

「原子力資料情報室」 <http://www.cnrc.jp/modules/news/article.php?storyid=1022>

「全国放射能情報」 <http://atmc.jp/>

文部科学省原子力開発の推移

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpaa196501/hpaa196501_2_020.html

昭和 39 年原子力小委員会議事録

<http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/syugiin/046/0076/main.html>

日本の原子力政策についての論文（独立行政法人経済産業研究所）

<http://www.rieti.go.jp/jp/publications/pdp/09p002.pdf>

上野村にも東京電力の発電所があります

2011 年 4 月 5 日 火曜日

こんにちは、サイト管理人です。

未曾有の震災からそろそろ1カ月が過ぎようとしています。

被災された地域の方々に、心よりお見舞い申し上げますとともに、この震災でお亡くなりになられた方々に心よりお悔やみ申し上げます。

今回の震災は、地震と津波に加え、原発事故まで発生するという大惨事になってしまいました。地震と津波は自然災害ですが、原発は言うまでもなく人間が作ったもの。「安全」という神話は脆くも崩れ去り、人間が制御できる範囲を超えています。

連日報道される東京電力の記者会見、この深刻な事態に憤りを感じると同時に、放射能漏れによる健康被害を心配する不安な毎日です。

また、原発の現場で働く方々は危険を顧みず必死の作業を続けています。その職業意識には本当に頭の下がる思いでいっぱいです。1日でも早くこの非常事態が収束するを願ってやみません。

さて、日々の報道で「東京電力」という言葉を見聞きしてふと思いだしたことがあります。

それは、東京電力は群馬県の長野県の南相木村と群馬県の上野村との高低差を利用した水力発電所があるということ。ダムの水は御巢鷹山の下を流れています。取材で御巢鷹山を訪れた時、山間に突然姿を現した巨大なダムは強烈な印象でした。

(東京電力神奈川発電所・以下 URL 参照)

http://www.tepco.co.jp/gunma/hydro/zukan/z_41-j.html

このダムは本書でもふれている通り、日航 123 便墜落事故の後計画が持ちあがり、平成 17 年に建設されました。

連日の原発報道で少しこのダムのことを思い出したので、書き込みをさせていただきました。

事故後突然持ち上がったダムの計画・設計、今回の原発事故の対応で明らかになった保

身に走ろうとする東京電力の体質、錯綜する情報、青山さんも前回の編集部だよりで書いているように、本当に26年前のあの事故をめぐる対応と似ているように思います。皆様はどう思いますでしょうか？

カテゴリー：編集部だより

未曾有の大震災から26年前を思い出して 青山透子

2011年3月15日 火曜日

テレビの向こう側で起きていることを自分のことのように思いながら、胸を締め付けられる思いで見ていると、親友や知人などからポツリポツリとメールが返ってくるようになりました。少しずつでも復旧しつつある様子に安堵しています。

それにしても、誰もが思っていると思いますが、東電社長をはじめ東電社員の説明者、保安院の人たちの会見に、まるで危機感のない雰囲気を感じませんか。

「あせらずに冷静に」「国民を煽らず」「真実をしっかりと伝える」という姿勢を感じますか？

私にはどうしても原発爆発に至るまでの対応が後手に回った責任逃れの思いが、彼らの顔に出ているように思いました。

実際に「国側の情報」に素直に従った人が被爆してしまったようです。もっと迅速に早く遠くに逃げられたのに、本当に悔やまれると思います。被爆の程度の問題ではありません。

危機管理の基本、それは正確な情報と判断力です。そして現状を見極めることです。そのためには現場でのとっさの判断が不可欠で、責任ある立場の人間が常に現場を意識し、現場の人々を中心に最善の方法を考え抜くことが重要なのです。

現場に行って経験をして、初めて気づくことが山のようにあります。

一方でぬくぬくした部屋で現場を見ずして、自己中心的な経験や知識、臨場感のない人、現場力のない人たちによる判断は最悪のパターンでしょう。

26年前の御巣鷹山事故を再調査するにあたって、一番の妨げになることは何だと思えますか。それは隠ぺい者や関係者、様々な当事者ではなく、次のような一般人が大きなハ

ードルとなります。ちなみに隠ぺい者とはそういう人たちを煽り、利用することが得意だと思います。

たとえば、このような人がきっと身の回りにいるはずです。

- ①自分の想定範囲を超えたことに対して、すべて否定する人
- ②自分なりに詳細に調べた結論と不一致（いわゆるおたく的発想）から相手の説を否定する人（知識のひけらかしごっこですね）←これは男性がほとんどです
- ③「まさか、うそだ」という単なる否定から、問題点を受け入れられない人

自分の想像を超えた内容を相手から話された時、人は必ずそれを否定にかかります。どうも本能的にそうになってしまうようです。

次に、その話について信頼出来るかどうか、または納得出来るかどうかは、どれほどそれについて関心があるか、詳細に調べているか、知識があるかによりますが、一番良くないのは、知識がある人（自分の得意分野、または専門分野だと思い込んでいる人）で現場力のない人です。

たとえば、パイロットでないのに知識はそれ以上あると思っている人（その昔テレビゲームで操縦をしていて実際の飛行機をハイジャックしてレインボーブリッジをくぐりたかったという人がいましたが）、相手が自分より目下だからと突っ張る人、とくに男性は女性に負けたくないという本能があるので、女だからという理由を持ち出して自分のほうが上だと思ふ人などなど…… 実に困った障害物です。

そういう人たちが次にする行動とは、排除です。つまり自分のわけのわからないことを言っている人を避ける、またはその人を避けるように他人に言う、またその人を疎外感に陥らせる、です。

「阻害」ではなく、疎外することで仲間はずれとし、大衆の意見ではないとして「変なことを言っているとみんなに馬鹿にされるよ」「あの人の言うことは聞く必要がない」とすることで、浸透することを避けるため、真実が見えなくなっていくのです。

実はここにも落とし穴があって、そうすることで自分の身を守っている人もいます。さらに、「こんなこと言ったら誰かが襲ってくる」とか、「これはまずいんじゃないの」

「日本のためにならないでしょう」「隠したほうが身のためだよ」のような間接的な脅し発言です。ちょっと映画の見すぎかもしれません。

そうならないように、私の本では非常に神経を使いました。事実以外書かない、新聞等の客観的報道から疑問に思ってもらう、という手段で書いたのです。それでもなお、一部分だけを切り取って「ああだ、こうだ」と批判する人もいますが、それはその人の性格と思惑でしょうからこれは仕方ありませんね。

ですから、「週刊金曜日」で取り上げた部分について、上記のような一般人といきなり話をしても無理です。

まずは私の本を読んでと勧めてみて下さい。そして共通の認識を持ったうえで、もう一度ゆっくりじっくり話をしてみると少しは理解してもらえるとと思います。

けして煽りではなく、事実は事実として現場で起きていること、起きたことを受け入れることから必ず真実は見えてきます。

私のこのサイトをお読みの皆さん一人一人の人間力が、再調査には大変重要です。

どうぞよろしく申し上げます。

カテゴリー: 編集部だより

東北地方太平洋大地震 青山透子

2011年3月14日 月曜日

あまりにもすさまじい大地震に絶句……

被災者の皆様には心から哀悼の意を表します。私は宮城県出身です。

つい先ほどようやく身内と連絡が取れましたが、信じられない故郷の光景になにもするすべがありませんでした。まだ友人、知人とは連絡が取れていません。

テレビの向こう側の悲惨な状況には言葉もありません。きっと生きていることを信じて

おります。

福島の原子力発電所の爆発の報道では、ネット上（BBC ニュース等）で流れた爆発画面を見る方も多く、NHKでは写真報道でした。いまやネットが上ということでしょうか。それに伴いチェーンメールもありますが、ただし、何が本当なのかについても、マスコミ報道も含めて必ずしも正しいとは限らないので注意が必要です。

福島原発事故のもともと原因は、保安院によると「地震による停電で外部からの電力供給が失われたことや、冷却水をさらに冷やす海水を取り込み、動かすポンプが津波で被害を受けたことなど」を挙げていましたが、当然のことながら停電対策、ポンプ対策はしていたはずで、とくに東電の発表で疑問だったのは（どこかの議員の方も言っていました）補助電力が作動しないというもっとも基礎的な部分が欠落して生じた事故である、という点で、つまり停電で補助電力を供給しようと思ったら、カラだった？というレベルだということですから、今後厳しく追及されることでしょう。この地震国において想定外という詭弁は使えないはずで。

いずれにしても、このような原子力に頼った国に住んでいる事実を深く見つめる必要性を感じました。深夜までの営業や自動販売機など便利な世の中と引き換えに「多少不便でもいい、足るを知る」ということも皆さんで考えたいと思いました。

それから、今回の米軍は沖縄発言もあってか巻き返しのごとくスピーディな活動をしていますし、自衛隊の方々も昼夜問わず必死に救助してくれています。

また特に印象深かったのは、夜、真っ暗な中で燃える気仙沼市の様子を自衛隊の東北方面隊の夜間ヘリから撮影したものを夜中放送していました。

26年前のあの日、JAL 123 便の事故当時に自衛官でいらした方々からもメールをいただきました。26年前も夜間に飛べるヘリを自衛隊は持っていたし、暗闇でも飛べる訓練をしていた、なのに出勤命令が出なかった、という内容でした。

国会答弁で山下元運輸大臣は「自衛隊は夜間に飛べるヘリを持っていない」との間違った？発言をして、その後他の議員からの追及で訂正していましたが、依然として自衛隊幹部の発言では「持っていても危なくて飛べなかった」などと発言していた記録も残っています。しかし事實は、飛べる人たち（夜間飛行訓練や夜間に山々に降りる訓練）がいて、いち早く救助をしたかった人たちがたくさん自衛隊にいて、なのにその行動とは逆の命令をした人たちがいたという事実。

今回、この未曾有の大地震では、当然、人命第一で迅速な救助活動が行われていますし、米軍、自衛隊、そして世界中からの救助隊の皆様も次々と駆け付けて来ています。

これが正常な救助活動であって、エマージェンシーですからそのやり方はプロとして当然です。習志野駐屯地からは夜間も次々大型ヘリが飛んでいきます。

それなのに26年前の8月12日は一体どうして出動出来なかったのか……

それを残念がって、悔やんでいる人も多いのです。

この大地震での迅速な救助活動を目の当たりにして、これが26年前は出来なかったとは言わせない。

26年前「出来たのに、させられなかった人たち」の心の叫びも私達は共有したいと思います。それは事故に遭遇した本人、遺族以外の人たちの「救助するプロ」としての叫びです。

そして逆に組織、国家を守ったつもり？で、まったく別の命令をした人たちの心の中に尋ねたいのです。

「あなたのその命令は、もっとも大切な人の命を救う命令だったのですか」と。

カテゴリー：編集部だより

「週刊金曜日」前編（2月18日）後編（3月4日）の掲載を終えて 青山透子
2011年3月9日 水曜日

昨年夏の終わりの台風の日、この記事のインタビューがありました。

暴風雨で頭から足までびしょ濡れになって指定された対談の場所へ行ったことを思い出します。その次の日、猛暑続きの茹だるような暑い日々がガラリと変わって秋風が吹きました。

あの日を境にまったく異なる天気となり、爽やかで抜けるような秋空になったのです。

それは天空が味方してくれたのだと思うほどの青空でした。つまり、この事故関連の暗雲を取り除き、抜けるような空となるために日米合同の再調査をしましょう、ということ
を天空の星たちが語ったような気がしたのです。

対談日から半年後の記事となりましたが、ちょうど地上波放送で「沈まぬ太陽」がノン
カット放送されたこともあって、若い世代からあの日を思い出す世代まで、いろいろな人々
からの反響がありました。皆さんとても真摯な考えを持っている方ばかりで、こちらが逆
に励まされております。ありがとうございます。

記事内容の事実については、一般の人は信じられないと思うことも多いでしょうし、ま
さかと思う人も多いでしょう。でも本当のことしか書いていませんので事実です。

今後、事実を事実として受け入れる作業が一般の人たちは必要だと思います。そのうえ
で、日本中の心ある人たちが協力して再調査をすべきだと思っています。

皆さん、ぜひ一度ボイスレコーダーをネット上で聞いてみてください。そして私の本の
グラビアはカラー写真ですので、手に取ってゆっくりご覧ください。

なお、窓の外に黒い点の部分映した写真をカラーで掲載しているのは私の本だけです。
読者の方で、コンビニのカラーコピーでその部分だけを最大限拡大をしてオレンジ色にな
るのを確認した方もいます。

一人ひとりの力が大きな力となる日を皆さんと考えながら一歩ずつ進んでいきたいと思
います。未来への提言として何が出来るのか、それぞれの分野で活躍している皆さんの力
をぜひ貸してください。よろしく申し上げます。

カテゴリー：編集部だより

対談記事続編・本日発売『週刊金曜日』に掲載

2011年3月4日 金曜日

本日発売の『週刊金曜日』に、青山透子さんと、元テレビ朝日プロデューサーの岩下俊三
氏の対談後編が掲載されます。

これは、2月18日発売の『週刊金曜日』の対談記事の続編になります。

<http://www.magazineland.jp/tenkuu/?m=20110215>

現場の状況、捜索活動の遅れなど、不可解な謎、矛盾点が残る調査報告書。

未だに解明されていないこれらの疑問に対し、事故の再調査を願って、一人でも多くの方にこの事故を今一度知っていただくきっかけになれば、と思います。

ぜひお手にとってご覧ください。

カテゴリー: 編集部だより

「JALの鶴丸復活？」 青山透子

2011年3月1日 火曜日



同じように見える鶴丸ですが、実はJALの部分が太くなっているのがわかりますか。

1985年事故当時はJALのロゴが斜めになってもう少し細い文字です。1989年にはさらにJALの部分と色が若干変化していますので、皆さんもお手持ちのものや写真をよく御覧なってみてください。

「初心に帰って原点を見つめる」ということで今回、更生会社の復活をこの鶴丸復活に賭けてみたのですが、私にとっては事故の歴史そのもののマークです。羽田沖事故も鶴丸がくっきり羽田沖合の海に浮かんでいましたし、御巣鷹山の事故ではこの鶴丸部分が吹

き飛び、その一部が相模湾から発見されました。

2010年度は黒字になったと喜んで報道してもらっていますが、実は円高やオイル安のおかげであり、全日空の客観性あるきちんとした試算に比べれば、JALの経営は非常に甘く、今後少しでも円安やオイル高騰が続けばすぐに吹き飛ばすような利益です。

つまり足腰がしっかりとした会社に更生したわけではなく、一時的な状況によって黒字になったにすぎません。その点については稲盛さん自身も心の奥底で思っていることでしょう。

今回、昔の顔に化粧をし直したようなマーク復活報道は能天気と言われてもしかたがないでしょう。マスコミの記者達もプロとして、ただ言われるままにJAL復活をお祝するのではなく、多額の借金棒引きや国民の財産である税金を注ぎ込んでいる事実、保険会社に出資してもらってもそれは保険をかけることと引き換えであることや、旅行会社にはキックバックで返すという裏約束があることなど、当然のことながら冷静に客観的な記事を書いていただきたいと心から思います。その厳しい目があってこそその報道魂、記者魂ではありませんか。そして小手先だけの会計操作や改革ではなく、厳しい目に鍛えられてこそ真の更生会社復活と言えるのではないのでしょうか。このままの状態でもた同じことが繰り返されないように2011年度の会計報告を注視していく必要があります。鶴丸マークを経費節約のために7、8年で塗り替えると言っていますが、過去をキチンと清算しないような会社は、その頃にはこの会社が影も形もなくなって、あのパンナムのようになっているのではないかと思います。

カテゴリー: 編集部だより

『週刊金曜日』で語った再調査へ向けて 青山透子

2011年2月23日 水曜日

「週刊金曜日」2月18日号はお読みいただけましたか。

後ろ姿で申し訳ありませんが、教え子たちがいわれのないリストラの対象にならないように気を配りつつ、今後の取材の為にも失礼させていただきました。

記事内容に関して、当時を知る多くの方々から良い反響を頂きまして、本当に有難うございます。さらにこの公式サイトを通じて沢山の方と意見を交わすことが出来ました。

皆さんのリベラルで誠実なお手紙も拝読しております。お礼申し上げます。

独自に調べた情報を提供して下さった方、未だに疑問を持ち続けている方など、事故に直接関係していなくても、多くの人の心の中にあの事故がいまだに存在しているのだとつくづく思っています。

事故原因については、一般の人達は何の疑問を持つこともなく今日まで来ているのだと思います。この私もそうでしたし、当時の社員間でも直接関係していない部署の社員はそんなものでした。というよりも、事故調査委員会がきちんと調べているはず、国が対処しているはず、当然のことながら偽りなどないはず、責任を持って出来る限りのことをしてくれているはず……

当たり前ですが、誰もが国を信じて、日本航空の社長の言動を信じて、人を信じていたのです。1985年の日本は独裁政治の国でも戦時中でもなく、自由溢れる素晴らしい日本だったので、一部の心ない人達が、まったく反対のことをして、救う命を救わなかった事実を隠していたとは信じられないし、信じたくもない、まさか国民を騙すことなどないと思うのは当然です。

しかし26年間も経って、ようやくそれぞれの人達の疑問点と他の点を結びつけることによって一本の筋道が見えてきたように思います。遺族の方以外でもあの事故原因を真摯に考えている人達と出会ってわかってきたこと、そしてその点を結びつける役割を私達一人一人がすることで、道の先にやっと見えてきた光を感じます。

あの事故については、ものすごく単純に考えてみると、実は何らかのミスをした人とそれが世の中に知れると都合が悪い人間が、実は保身のために、いかにも国家を語り、そしてその地位にしがみつきたかったために隠蔽し、それに多くのサラリーマン的発想を持つ日本人（米国人）が加担しただけだと思いませんか？つまり、国家を語る以前の話で、単に自分を守りたいから真相をもみ消すことで利益を得た人達によるものではないでしょうか。

それは、この事故は一つの大きな事件であって、それは国家の問題ではなく、ただミスを犯した犯人を隠匿した人がいて、その真犯人がまだ捕まらない状況だということです。いまだに隠匿し続けている人達は、なぜその罪の意識に気付かないのでしょうか。それは国を守っているのでも日本の為でも何でもなく、ただ犯人を匿っているにすぎないからです。それをわざと混同させて、お国の為には仕方がないと思って真実を語らないとすると、逆に日本国民全員の敵と言えるのではないのでしょうか。

26年という長い年月の間、心の奥にしまいこんでいた事実は、実は国の為でもなく、自分の為だったと気づくべきです。

沈黙と隠蔽、犯人隠匿と引き換えに、異例の昇進、お金、地位、名誉を手に入れた人は国民全員を敵に回した人と言えるでしょう。この事で反論の余地はないはずです。

そういう人間に対して、亡き520名の怒りは頂点に達していると心底思っております。真なる事実の前では誰もが謙虚になるべきだと思いますが、皆さんどうでしょうか。

なお後編は3月4日とのことです。

カテゴリー: 編集部だより

2月18日発売・雑誌『週刊金曜日』に青山透子さんの対談記事が掲載されます

2011年2月15日 火曜日

こんにちは。サイト管理人です。

今週の金曜日（18日）発売の雑誌『週刊金曜日』に、青山透子さんの対談記事が掲載されます。

この対談は、昨年

『日航機123便墜落から25年 再調査しなければならないこれだけの理由』

と題し、青山氏と元テレビ朝日プロデューサーの岩下俊三氏が123便事故の矛盾する調査報告等について語ったものになります。

今一度この事故の全容を知っていただくためにも、より多くの方に雑誌をご覧いただければ、と思います。

カテゴリー: 編集部だより

『沈まぬ太陽(山崎豊子著・新潮文庫刊)』ついに地上波放送！完全ノーカット版

2011年2月14日 月曜日

青山透子です。

皆さん、ご覧になりましたか？あの「しずまぬ太陽」が完全ノーカット版で放送されました。2月11日に日本テレビ系金曜ロードショーで4時間の長編！

CMが結構入りましたが、それでも見逃した方や何度も見ている方も十分鑑賞出来たのではないのでしょうか。本の帯を書いてくださったのは、この映画の監督、若松節朗氏です。ちょうど映画の最中にメールをしたところ「懐かしく回想している、重たさのある映画だった」と返信を頂きました。

思い起こせば私自身、必死に原稿を書いている最中にこの映画化撮影が行われて、エキストラに参加し、思いもかけずに若松節朗監督に帯も書いていただくという幸運に恵まれました。すべてがすごいタイミングだったと思います。

まるで坂本九氏の「ステキなタイミング」の歌のようでした！きっと星空の向こう側から坂本九ちゃんも応援してくれたのだと信じています。

日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した時も監督へお電話して、喜びを分かち合いました。若松氏との出会いも心から感謝したいと思っています。

いつの日か、今度は「沈まぬ太陽」では描けなかった、本当の事故原因を追及した日米合同映画でも出来たら、きっと九ちゃんや私の先輩達も心底喜んでくれるでしょう。「これが本当の事実だ！やっと私達の気持ちが伝わった」と……そんな日を夢見ております。

このサイトを読んでいる皆さんと共に、矜持を持ち続けてその日を迎えたい、そんな気持ちでいっぱいです。応援宜しくお願いします。

カテゴリー：編集部だより

うさぎ年は飛躍の年！ 青山透子

2011年2月8日 火曜日

2011年のスタートはいかがでしょうか。1月もあつと言う間に終わり2月です。

2月3日の節分には豆まきをしましたか？

ちなみに成田空港の守り神、空の安全を願う成田山新勝寺の豆まきでは、「福は内、福は内」のみで、「鬼は外」とは言いません。なぜならばご本尊のお不動様は鬼の顔をしていらっしゃるのです。鬼は外ではないのです。次の絵のようにお不動さまのお姿は非常に怖い顔

をしています。



お不動さまは真っ黒でひどく怒っておられる姿をしている

①左の手にはどんな人でも仏の教えに引き入れるための索（なわ）を持っている

②右の手にはあやまった行いや煩惱を断ち切るための利剣を持っている

③岩の上に座っておられる

④世界を焼き尽くす程の猛火を背負っている

「こんがら」はサンスクリット語の「キンカラ」の音写で、「命ぜられたことを何でもする者」という意味。漢訳では「キンカラ」を「敬い、従順し、慎み深く僅かなこともおろそかにしない」ことを意味する。「せいたか」はサンスクリット語の「チェータカ」の音写で、「人に奉仕する者」という意味。

お不動さまは、真言密教の総徳である大日如来の化身で、私たちの煩惱や色々な迷いを鎮め、さまざまな障り・災難を払うために大いなる怒りの相を示されている。どんな所へでも出向き、すべての人を救済するため、奴僕（ぬぼく）の姿を示されている。お不動さまの右手には、悟りを開くための智慧を表す利剣を持ち、心のあらゆる迷いを断ち切ってく

ださる。左手には、索（なわ）を持っておられ、仏教の教えに背く人をも自分の膝元に引き付けて、正しい教えの道に導いてくださる。私たちが一心にお祈りいたしますと、何人たりとも救わずにはおかないとするお不動さまの大慈悲心によって、ご霊験ご利益をお受けすることができる。

（以上成田山のホームページより）

つまり、心のあらゆる迷いを断って正しい方向へ悟りを開く剣を持つ右手、そして煩惱や悪、迷いによって断ち切れない者も、首に縄に引っ掛けて表へ引きずり出して己の懐にいれるという強さの左手を表しています。世界を焼き尽くすほどの強いパワーを持ち、恐ろしい程の強い正義感が世の中には必要だという表れではないでしょうか。

成田山の上空にはたくさんの飛行機たちが行き来しています。その安全と無事を祈り続けているお不動様の姿はこのように気迫に満ちた凄い顔なのです。

さてこの迫力あるお姿を目にすると、これ程までに大きな事故について疑問を持たれながら25年間も放置し続けてきた関係者たちに対して、お不動様の怒りがこみ上げてきているような気がします。

一人一人の善意が積み重なって、26年目の今年は大きく飛躍したいものです。

新年明けましておめでとうございます 青山透子

2011年1月6日 木曜日

2011年（平成23年）、新しい年を迎えていかがお過ごしでしょうか。

今年は兎年。マガジンランドさんは「うさぎと暮らす」で有名ですが、きっと兎が運んでくれる御縁があるような気がします。

本を通じて出会えた人びとや読者の方々と共に、新しい希望と真実に向かって突き進んで行きたいと思います。今後とも応援の程、どうぞよろしくお願い致します。

新年早々の新聞には「現実を直視、今年こそ！」という文字が目立ちました。

どの方向に向かって進んで行くのか、不透明な政治や経済、そして人々の暮らし……

でもそれらすべてを後回しにせずにその場しのぎでなく、今行動することこそが

将来のためであり、今は苦しむ時かもしれません。その山を越えた先に見えるのが、本物の安らぎの世界であるような気がします。

昨年は、先送りと現実を直視しなかった日本航空という巨体が潰れました。

再建とばかり言って、倒産という言葉を避けていることも、現実を直視していない表れです。このままでは恐らく二次破綻するでしょう。それは、JALに残っている人々の意識の低下が顕著だからです。年賀状の文面にも残念ながら能天気さが表れていました。

なかには、「JALは風邪をひいた程度ですから大丈夫!」「残った人間は保身の塊ばかりですが、自分もどうにか残れました?」「また国が救ってくれるでしょう」

「子会社に出向となり、今度は頭を下げる側になりました!お辞儀の練習中」?

まるで、何所かの天下り役人のような言葉が記されているのもありました。

そして、誰も「国民の税金で首がつながったので頑張ります!」とは書いていませんでした。これらの年賀状を稲盛氏にもぜひ見て頂いて、いかに残った人間で再建が不可能かを実感してもらいたいものです。

企業は人なり……そして国もそこに住む人々が集まった形です。

その中で、今年は勇気ある人、問題意識の強い人、正義感のある誠実な人達と共に語り、共に考える一年にしたいと思っています。

どうぞよろしく願いいたします。

2010年元旦に思う

カテゴリー: 編集部だより

今年1年お世話になりました。

2010年12月28日 火曜日

こんにちは、サイト管理人です。

日航ジャンボ機墜落事故から 25 年という節目の年に、『天空の星たちへ』が世に出ることになりました。

企画から取材までに1年を費やし、色々な人にお話を聞き、資料を集め、世に出た1冊です。読売新聞の書評をはじめ、各方面でもご高評いただき、読者の皆さまにも興味深く読んでいただける本になったと思います。

この本を読んでではじめて「事故原因が矛盾するという事実を知った」という声も多くいただいております。そして、最後の最期までプロとしての仕事をまっとうしたクルーたちがいたということ……。520名もの命を奪ったこの事故は、どうして起きたのか……。この事故が風化されることのないよう、少しでも多くの方にこの本を手にとっていただけるよう、来年も活動していきたいと思っております。

サイトをご覧くださった皆様、今年1年お付き合いありがとうございました。

来年もどうぞよろしくお願ひ致します。

カテゴリー: 編集部だより

日航機事故 25 年目もあとわずか！ 青山透子

2010 年 12 月 8 日 水曜日

この節目の年に出版し、本を通じて皆さまと出会えたことに心から感謝申し上げます。

読者の皆さんといろいろな情報を共有して語り合えたこと、そして皆さんの心のこもった感想に励まされた本当に嬉しい日々でした。本当に有難うございました！

構想 5 年、執筆 1 年、毎日毎日が古新聞や書物、古い雑誌との格闘の日々でした。

学生たちが書いてくれた寄せ書きを机の前に貼り、快くインタビューに応じて下さった方々の顔を想い浮かべながら、積み上がった資料の山に埋もれて、一言、一言を生みだし書いたことは一生の宝ものの時間でした。

亡き先輩方が、後ろからぬつと顔を出して、いつもチェックして私の原稿を覗き込んでいるような気持ちでしたが、今では「あら、なかなか良く書けたじゃないの」と、きっと喜んでくれたらうなあ、と勝手に思っています。

しかし残念ながら、今年、決定的な事柄や証言が出たわけでもなく、再調査への道を模索しながらのあつという間の 1 年でした。こうやって普通に 25 年目が過ぎてしまうことに、とても情けない様な気持ちになります。

時間と共に真なる事実はぐんぐん遠のいてしまうのでしょうか。新しい事実が出れば国際条約上再調査が出来て、薬害エイズ同様に関係者が行動を起こせば、政治的動きも出て注

目が集まって国民の意識は高まり、きっと真実は見えてくるはずですよ。
すべてを闇の中に、破棄した書類同様葬って、本当に日本の未来があるのでしょうか。いやそれはないはずですよ。

いまやネット社会が、報道機関へ突破口を開け始めた、メディア変革の過渡期です。

25年前のあの日に関わった人達、その時の事実を知る人達に、本物の強さと優しさが芽生えた時、道は開けると私は信じています。

あの時子供だった人達は、ぜひ自分の身近な大人達に問うてください。

「お父さん、お母さん、あの時は一体なにが起きたの。お父さん、何をしたの」と……

そこから、本当の過去の克服が始まるのです。そのチャンスは、守秘義務という自己都合のベールで覆う事ではありません。新しい事実が出た時、当時は言えなかったことでもそれが新しい事故原因につながる時、きちんと報告する義務が国際条約上にあります。そして皆で知ることが、未来へつながるとつくづく思った1年間でした。

カテゴリー: 編集部だより

11月5日 仙台講演大成功!

2010年11月15日 月曜日

青山透子です。連休も終わった金曜日の夜、仙台弁護士会館にて講演を行いました。

150枚のレジメはすぐなくなり、補助椅子を出して200名近い方が来てくださいました。

天空の星実行委員会の若手弁護士メンバーのパワフルな運営と、増田法律事務所の増田様との出会いによって実現したこの講演。

多くの市民の方々に、この本のいきさつや、事故についての詳細な内容、そして取材記録をお見せしながらお話する機会に恵まれたのは、嬉しい限りです。長時間熱心に聴いて下さったことに心から感謝申し上げます。本当に有難うございました。

会場では、25年前のあの日を思い出しながら、あの事故原因について知らなかった事実関係について、またそれを知ったことによる衝撃も大きかったと思います。

数々の資料や取材した事故現場の人達の話についても、事実の陰にある何か大きな問題について考えざるを得なかったと思います。

このように自分で考えて、疑問を持ち、そして問題意識を持つことから、少しずつ世の中は良くなっていくのではないのでしょうか。

飛行機事故は人ごとではありません。勿論日常的な交通事故に比べたら、本当にものすごく低い確率ですが、一度起きると大勢の人達が犠牲になってしまいます。

そのためにも全ての情報は開示して、全世界で共有しなければならないと思います。

仙台講演では、私の持つ日焼けした古い新聞資料を展示させてもらいました。

当時のニュースを見ることで臨場感が出たと思います。

来場者の方、仙台市民の方々、河北新報の記者さん、そして天空の星実行委員の方々、仙台弁護士会の皆さん……

大きな力を下さって本当に有難うございました。また今後ともよろしくお願いします。

カテゴリー: 編集部だより

ご遺族の方を描いた舞台を見てきました。

2010年10月12日 火曜日

こんにちは。

サイト管理人です。昨日、著者の青山透子さんと、下北沢の「ザ・スズナリ」にて上演された風琴工房さんの舞台『葬送の教室』を観てきました。<http://www.windyharp.org/>

上演後後にはトークショーがあり、ゲストは取材でもお世話になった、飯塚訓さんでした。飯塚氏は、当時藤岡体育館で警察の身元確認班長としてお仕事をされ、後に当時のことを本に書かれています。

舞台は、実際のご遺族の方がモデルになっているのですが、いろいろと考えさせられる舞台でした。

物語のあらすじは、劇団 HP（上記 URL）をご覧ください。

事故の調査・教訓を活かし、航空安全を考える組織を結成するご遺族の有志の方々を描い

たものです。

中でも印象的だったのは、「悲しみの表現はそれぞれ違う」ということ。

そのために残された家族がバラバラになったという家族もたくさんあるというお話が印象的でした。

今回の公演は昨日が最終日だったのですが、とても良い舞台でしたので、再演などの機会がありましたらまた多くの皆様に見ていただきたいと思いました。

カテゴリー: 編集部だより

「見えないものでもいるんだよ…ゲゲゲの女房より」青山透子

2010年10月1日 金曜日

NHKの朝ドラが終了しましたが、ドラマによく出たこのセリフが私の心に深く残りました。実はこの本を執筆中の1年間にわたって、その言葉通りの経験をしたからです。

ではその話を少ししましょう。

私が1985年の事故当初から集めていた、おびたしい数の茶褐色に変色した新聞記事(切り抜き)と当時の雑誌、国会図書館に通って調べた資料、大國氏の提供による資料等をすべて時系列に並べて、もう一度読み始めるところから執筆の構想が始まりました。

そして1年間、私は夜通し書き続けてようやく本という形になったのですが、この間に実に様々な経験をしました。これらの経験は言葉に表せないような経験なのですが、逆に言葉にすると、安っぽく、お化けっぽくなってしまい、信ぴょう性を問われるかもしれませんが、本当にあったことです。

私の部屋は、積み上げた新聞記事、関連書籍や雑誌、コピーなどで、足の踏み場もない状況の中、突然夜中にある部分が気になってどうしてもその記事を読みたくなった時、不思議なことに、ふっと手が触った所にその記事があったり、またふっと何かをよけた所に目的の本があったり、まるで私の後ろに秘書がいるような時が何度もありました。特に明日、出来上がった部分を出版社に持って行くという、緊急な場合にそれが頻繁に起こったのです。ぐちゃぐちゃの中から、スッと出てくる資料を見るたび、「あ！もしかして520名

の誰かが私の秘書になっているのでは？」と思いました。特にアノ先輩かな？コノ後輩かな？と想像しながら、複雑な資料でも、あっという間に（部屋中積み上げた中で何所かもわからないのに）スッと紙が出てくるおかげで何度も助かりました。

それからもう一つ。名前のことです。客室乗務員の部分はプライバシーも書いているため、それを考慮して、出版社と何度も協議の結果、仮名にしました。その中で、どうしても前山先輩は中心的な人物となるため、名前の部分にこだわりを持ちたかったので熟考した名前を仮名として、書き進めました。

御巢鷹の尾根に登った時、その前山先輩の墓標がなかなか見つからず、最後の最後に私の隣に伏せて置いてあったメンテナンス用のところからひょっこり出てきたのですが（これは本に書きました）この時見つかった喜びと共に、一瞬あれ？という違和感がありました。その時はなんだかよくわからなかったのですが家に帰ってきて、早速原稿を書こうと思い、パソコン画面を見てビックリ！

なんと、私の仮名の名前と同じだったのです。つまり仮名とした名前が墓標に書いてあったということです。これには本当に驚きました。

なぜこうなったのか……おそらく推測ですが、前山さんは結婚して1カ月後の新婚初フライトで逝ってしまったのですが、結婚で姓が変わった時に、名前の部分も何らかの理由で代えたのでしょう。時々、姓名判断で結婚後の姓と相性が合わない名前の時、戸籍上はそのままですが、名前の部分の漢字を変える人がいますね。きっとそれだったのだと思います。ただ新聞記事はすべて旧名前で記載してあったため、私は全く知りませんでした。当然知らないまま、仮名を作ったのです。それが実際に御巢鷹の尾根で墓標を見た時、なんだか見慣れた名前だなあ？と思いました。それにしても原稿の中でその文字を見た時の衝撃は忘れられません。きっと仮名にしないでいいよ、と言ってくれたのかもかもしれません。このままで出したかったのですが、編集者と協議の上、仮名を仮名？に変えました。

「見えないものでもいるんだよ、見えないものでもあるんだよ」

本当にそう信じた執筆期間でした。なお、編集者の石原さんも同じように、驚くべき経験をしたので、二人で、きっと私達の周りにいつもいるね、と語り合っています。きっと皆さんの周りにも、見えないけどいるんだよ、そう思ってお読みくださいね。

カテゴリー: 編集部だより

本に隠れた貴重な資料 2

2010年9月27日 月曜日

こんにちは、サイト管理人です。

前回はネットニュースのお知らせをしてしまい、帯の七福神の説明がすっかり遅くなってしまいました。

さて、この七福神は、松尾静麿さんが社長を務めていた時代（1961～1971年）に日付変更線を通じた証明として、JALの機内で配られていたものです。松尾社長は、ジェット機、ジャンボ機の導入、新たな国内・国際路線を開設し、世界の空に日本の翼を大きく羽ばたかせたことで知られています。

また、安全性を最優先し、「臆病者と呼ばれる勇気を持つ」という有名な言葉も残していません。

海外旅行が今ほど手軽ではなかった時代に配られたこの「日付変更線通過証明書」は、航空ファンの間では貴重な資料となっております。

カテゴリー: 編集部だより

ネットのニュース配信で青山透子さんのインタビューが紹介されています

2010年9月7日 火曜日

皆さんこんにちは。サイト管理人です。

とても急なお知らせになってしまいましたが、昨日からインターネットのニュース配信サイト『リアルライブ』にて、青山透子さんのインタビューが配信されております。

<http://nnp.co.jp/>

内容は、本書の中でも触れている当時の中曽根総理大臣の行動に関する事、そして、先月『週刊現代 8月14日号』に掲載されて話題を呼んだ「オレンジの光」について触れています。

皆様ぜひご覧ください！そして意見をお寄せください！

カテゴリー: 編集部だより

本に隠れた貴重な資料

2010年9月6日 月曜日

皆さんこんにちは、サイト管理人です。

厳しい残暑が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか??

25年目の夏を向かえ、先月はニュース番組や新聞で事故関連の特集が多く見られました。

本書も、Amazon の中古本で定価の倍の値段がついたり、一時品薄状態になっておりました。

大手の書店さんや Amazon さんには在庫を補充しましたので、ぜひお近くの方々にもおすすめいただければ、と思います。

さて、今回はこの本のしかけについてお話したいと思います。

実は本書には、貴重な資料が掲載されています。

お気づきの方はいらっしゃったでしょうか??

マニアックな航空ファンの方しか気がつかないかもしれませんが、実は本書のカバーをめくって裏表紙を見ると、在りし日の JA8119 号機の写真があります。

これは、航空ファンの方が提供して下さった貴重な写真で、本サイトでも使用させていただいております。

本書のポップにも掲載しておりますので、ポップを書店さんで見かけた方はお気づきかと思えます。

そしてもうひとつの貴重な資料は本書の帯。

裏の折り返しの所に七福神がいるのはお気づきでしょうか??

この七福神にも実はちゃんと意味があるのです。

その意味とは・・・

もったいぶるようで申し訳ないのですが、また次回の更新でじっくりと書かせていただきたいと思います！

カテゴリー：編集部だより

NHK 朝イチ 8月19日（木）放送で出たグラビア4ページの写真

2010年8月23日 月曜日

この日のテーマは「日航機事故から25年～家族が語る命の絆」として「執念の真相究明」というタイトルが新聞に書いてあり、8.12連絡会（遺族会）の美谷島邦子さんがゲストでした。

その番組の中で、私の本のグラビア4ページに掲載してある『窓の外を写した黒い点のある風景写真』が突然大写しとなってテレビ画面に出ました。

唐突に出たこのカラー写真でしたが、御覧になった方はお気づきでしたか？

番組中、いつもはNHK特有の台本通りのスムーズな会話のはずですが、この日はなぜかアナウンサーの言葉も詰まり、ゲストの森公美子氏においても、事前に内容を知らされないまま出演したとのことでした。

今までNHKにおいて、日航機事故の原因究明について語ったり、事故原因が不明のままである、という事実を伝えたりしたことはなかったのではないのでしょうか。確実に言えることは、メディア側においてもこの事故について、自分達の報道内容に疑問を感じている人達が増えているという事です。

数字の偶然性を本で何度も出しましたが、実はこの日8月19日、不思議にも819と並びます。（事故機は8119号機）NHKから何らかのメッセージだと受け取るのは私だけでしょうか。

ネットでは、25年前のあの日のテレビ報道が見られます。歌番組の最中に臨時ニュースが入って、アナウンサーが「米軍が墜落現場を発見した模様」と語っている部分も見られます。10年後、星条旗新聞に記事が出た退役軍人の証言は真実だということです。

ネット上でNHKの報道の一部が削除されていますが、聞くところによると「墜落現場に救

助に向かった自衛隊員が何者かに射殺された模様」との報道もあったそうです。これは新幹線の速報ニュースにもなったそうですが、見たり聞いたりした方はいらっしゃいますか？

その瞬間の臨時ニュースには、必ず真実が出てくるものです。時間的に隠蔽のしようがありませんから当然です。これはどこかの国のトンデモない話や荒唐無稽な話ではなく、25年前のこの日本という民主主義の国において、実際にあったことだという事実を、冷静に皆さんと共有したいと思います。

25年目の8月12日に想う 青山透子

2010年8月16日 月曜日

紅色に染まる西空を眺めて先輩達の顔を一人一人思い出しながら、ネットライブ番組を行いました。

TACAさんの小気味よい司会のもとで、編集者の石原さんと共に2時間以上語り明かしました。長時間、大勢参加して下さって本当にありがとうございました。いかがでしたでしょうか。出来る限りわかりやすく、そして時には楽しく、また怒りと悲しみと憤りと……全ての感情を皆さんと共有出来たと思います。心よりお礼申し上げます。

私が新入社員の頃に今は亡き先輩達に仕事を教えてもらった時の失敗談や、ユニークなエピソードを思い出しながら聞いて下さった方、またいい加減な当時の首相の対応や、つじつまが合わないことをまことしやかに主張する何処かの政治家やいい加減さが目立つ事故原因に、思わず笑っちゃった方も多いでしょう。ドンドン笑って、ドンドン怒ってください。実はこれがとても大切なのです。

笑って怒って悲しむことが重要なのであり、最悪なのは無視することや黙っていること、そして一方的に知ったように批難することなのです。

実は、私が写真提供者の遺族にお会いした時も、その方は爽やかな清々しい笑顔を私に向けて下さり、楽しく話をしてくれました。同情は大嫌いだとおっしゃっていました。こちら側が神妙な顔で、悲しい顔をしてお会いしていたら、恐らく私と話をして下さらなかったでしょう。

こういった深い洞察力と心の機微がわかった上で、この事故原因を追及するという強い使命を持った人達が増えていってくれることを心底願っています。

さて今年の事故に関する報道は、日本航空の経営破綻問題と、風化防止、それに日航12

3便の事故原因問題を混同しているのが殆どでした。

報道機関のニュースでは、いまだ疑問の多い事故原因の不透明な点を明確に話さずに日航の体質を論じていました。

また、日航がなくなると事故も風化するなどという解説や論旨をすり替えた内容が多く、そのように語る方々もご自身の発言をよく理解出来ていないようでした。

事故調査に関する法整備と同時に、日航123便の事故再調査をすべきなのは誰も異論はないでしょう。それが現政権を担当している民主党の役割であり、過去においてそれが出来なかった政治家達は、今こそこれからの新しい日本を背負う若い人達へ事実を伝えることを使命とすべきです。

新聞の逆読みであぶりだされたつじつまの合わない数々の事実、科学的根拠の薄い事故原因（今なお推定の域のみである）を主張する人がいるならば、先に事故関連資料をすべて国民の前に開示すべきでしょう。日米合同調査ですから、アメリカには破棄していない資料があります。

次に、日本の財政がひっ迫している今、事業仕分けで集めたお金以上の多額の税金をザル（JAL）に注ぐような日本航空再建は即停止すべきです。

公共交通機関として安全性が疑われるようなひどい社内状況であれば、ただちに運航停止とするのが真なる経営責任です。対応出来ない路線は当然他社のチャーター便で解決出来ると、1月19日に破綻時においてすでにシュミレーション済みです。

最後に、JALが消えるとこの事故が風化するのではないか、という疑念ですがこれは全く別の話です。

それはたとえば、「犯人が刑務所で更生中ならば自分の感情をぶつける相手として存在するからいいが、犯人がまだ捕まらない、または冤罪である」という場合に非常に困るというイメージで、日本航空という実態が存在すればいいが、それがなくなると安全を訴える相手がいなくなることになって風化につながるというようなものですが、それは事故原因の真なる事実が解明されてからの話です。推定でとどまり、不起訴となっている現実を直視しなくてはなりません。この事故原因がまったく異なるものであれば、それは別の見方がそこに存在するわけです。

もし、自分が犯人でもないのに、犯人扱いされて、さらに罪を償う対象として永遠にその存在を強要されたら、あまりにおかしな話ではありませんか？

あの事故で誰も責任を取らずに不起訴となり、再調査を願い出て、署名活動をしてきた方々も多くいます。いかなる理由があろうとも、誰も他人を、それが法人といえども冤罪に陥れる権利などありません。そして隠蔽者の方棒を担いで、国家間を論じたり、蓋をしたり

することが美德だとか遺族の為だとか言いふらすことがいいはずありません。

きっと520名の星たちは、地上の人間の愚かさといひ加減さに腹を立て、二十五年経ってもいまだに事故原因を追及しない政治家達や、このまま風化してうやむやになることを望んでいる隠蔽者を怒っているだろうなあ、と想った12日でした。

カテゴリー: 編集部日より

8月12日20時よりネット配信特別番組をやります！

2010年8月9日 月曜日

皆様こんにちは。

あれから25年目の夏がやってきましたね。

先月末から、『週刊現代』（8月14日号）に本書の関連記事が出たり『週刊金曜日』（809号）に書評が載ったりと、周辺の報道も少しずつ増えてきました。

編集部では、今週の木曜日8月12日20時より、インターネットライブ配信にて、日航123便墜落事故について、特別番組を配信したいと思います。

Stickam、Ustreamで時事問題を扱うインターネット番組『極北の楽園』を配信中のインターネットブロードキャスターtaca氏を聞き手に、青山透子さんをゲストに迎え、この事故について語ります。本書の中でも触れている疑問や謎について、皆様と一緒に考える場になれば、と思います。

URLは下記になります。皆様ぜひご覧ください。

http://enca.sakura.ne.jp/123_top.html

カテゴリー: 編集部日より

本日発売（8月2日）『週刊現代』JAL機墜落25年後の真実について

2010年8月2日 月曜日

皆さん、暑い毎日ですがお元気ですか。

さて本日、画期的な記事が出ました。私の本のP4、グラビア掲載写真についての客観的な

考察についてです。

『週刊現代』で記事になった写真を順番に御覧いただくとより一層わかります。

これは遺族提供の写真ですが、窓の大きさが違って見えるのがわかりますね。

①窓が入りきれないほど近くで撮影し、機体が上昇中のために斜めになっている離陸直後の写真。これは一番窓側の座席に座った人が撮る構図です。

②問題の黒い点が写っている風景写真ですが、きれいに窓枠が入り、上から下への目線で写っています。通路側から中腰で撮影するところになります。私は通路に立ってこの位置から座席に座ったお客様の顔を何百回と撮影しましたから、よくわかります。R5 ドア付近に座ったこの一家が、何かを見つけて気になったので狙って撮った構図です。

それ以降の 3 枚の風景写真ですが、ちょうど窓側の隣の座席から写すとこの程度の窓枠となります。

さて、問題の黒い点の写った風景写真は、遺族の亡くなったお父様が撮影したという事実が浮き彫りになりました。そしてこの黒い点を、今の技術で普通に拡大していくとズンズンとオレンジ色になっていくのです。周りを黒煙が取り囲んでいる様子がぼやけて見えてきます。

当時オレンジ色の物体について色々言われましたが、荒唐無稽だという意見が殆どでした。つい最近まで私もそう思っていました。

しかし今こそ、墜落原因発生の直前に相模湾上空で撮影したこの写真に、オレンジ色の物体が写っていたという事実について、きちんと客観的に証明し、説明することが重要です。

この飛行機に向かってきているとみられるオレンジ色に見える物体は、普通この高度で民間の飛行機と同じ空域に入ってくるものではありません。

今度はこれを否定する側の人が国民側に説明すべきでしょう。

なお、今この事実は多くの研究者や法曹界の人々に伝わり、分析が始まっています。遅かれ早かれこの事実は、矜持のある志の高い政治家（単なる自己弁護と私利私欲の政治屋ではない人）が明らかにするでしょう。

その日が近いと思いますが、それまでの間、皆さんと一緒にこの事実を重く受け止め、520名の天空の星たちからのメッセージを胸に、25年前を振り返ってみましょう。

カテゴリー：編集部だより

1985年8月12日あの日の記憶 青山透子

2010年6月28日 月曜日

1985年8月12日、午後18時56分26秒 あなたは何をしていましたか？

今から25年前、あなたは何歳でしたか。

まだお腹の中にいた人、生まれたばかりの人、その生命誕生の気配すらなかった人もいることでしょう。あの時、延々と読み上げられる搭乗者名簿をテレビで見て、ラジオで聞いて、事の重大さとともに、心の奥深くに突き刺さった方も多いことでしょう。

私の本は、そんな皆様のあの時を呼び起こしていただけるように、そして乗客と運命を共にした乗務員達の、乗客を救えなかった無念の想いを、まずはぜひ聞いて、心で感じていただけたらという一心で書き上げました。

ただ、その過程において、次々と事故原因の客観的事実が明らかになり、教え子たちと共に、私の頭上に大きな暗雲が立ち込めてきました。実は私自身、圧力隔壁修理ミスだという事故調査委員会の発表を疑うことなく信じていました。

それが、いいや違うのではないかと思ったとたん、見えてきた真なる事実とは何か…

私が本を書く上で決心したことは、まず客観的事実以外書かない、新聞という公の誰もが読めるもので追究していく、主観中心に書いた本は参考にしない、ありのままを素直に表現するということです。

そこでおわりの通り、この事故原因の結論は、私が当時の総理大臣や運輸大臣でもない限りわからないということです。つまり書けない事実がそこに存在しているということです。

情報公開施行前に大量のこの事故関連資料を捨てた運輸省（当時）の未来への責任は非常に重く、やってはならないことをした事実は、国民の誰もがわかっています。

その上で、私ができる範囲は非常に限られており、胸の奥に痞えたような気持ちで読み終えた方も多いと思います。

まずはぜひ自分の頭で考えてみてください。ヒントは文中、写真に何度も出てきております。そのヒントについて、ぜひ皆さんとこのホームページで話をしていきたいと思っています。

なお、当時の記憶の中で、目撃した人や相模湾で漂流物を拾った人、無線を聞いた人、あの時刻に相模湾で船に乗っていた人や他社の飛行機から事故機を目撃した人等、ぜひ情報をお寄せください。そして語り合しましょう。それが明日の未来を築く真なる第一歩となることを願っています。

青山透子

カテゴリー: 編集部だより

公式サイトをオープンしました

2010年6月16日 水曜日

皆様こんにちは。

今年の夏で25年という節目の年を迎える、日航ジャンボ機墜落事故のノンフィクション書籍『日航123便あの日の記憶 天空の星たちへ』（青山透子・著）の公式サイトがオープンいたしました。

本サイトでは、情報掲示板と感想掲示板、2つの掲示板にて、読者の皆様からのご意見・ご感想、または新規情報をお求めしております。

事故当日のあなたの記憶、あの時どこで何をしていたか。その時何を思ったか……。

また、墜落前の123便を見たという方などなど、どんなに小さなことでもいいので、書き込みをいただきたいと思います。

皆様のお声をお待ちしております。どうぞよろしく願いいたします。